大震災紀念

金の星

十月号

第十號　第五卷

Z32-B88

大正十二年十月三日印刷納本　大正十二年十月五日發行

號トイナ·ンヤビラア

国立国会
8. 3. 26
図書館

快よき夏の滋強飲料

カルピス

まごころ
こめた
おくりもの

顧問 三宅驥一理學博士
泰東商店 酒造・食料品店・藥品
問屋 東京ラクトー株式會社
小壜、大壜、徳用壜、あり

581

讀者の方々へ謹告

九月一日。震災の慘狀は酸鼻を極めました。忽にして帝都の大半を焦土と化してしまひ、金の星出版部も全燒いたしました。また、印刷所の大破にて製版の大部分が破損しましたが、幸に金の星社も社員一同も無事でございましたから御休意を願ひます。讀者の方々のうちには御罹災のお方もおありと存じます、御見舞を申上ぐるさへ聲涙を催します。

本號は前號豫告通り「アラビヤン・ナイト」特別號として發行の筈でしたが、前述の如く破損製版の修版が間に合ひませんため、止むなく本號を「第一アラビヤン・ナイト」號とし次號(十一月號)を「第二アラビヤン・ナイト號」として本號掲載續物の外に、數篇の讀物を加へて發行することといたしました。此際のことゆゑ何卒御諒察を願ひます。尚、本號掲載の「大震災の日」は、諸先生の實感錢ですから御一讀をいたときます。

金の星社

目次

アラビヤの月（表紙・原色版）……露谷虹兒

大震災畫報（口繪・寫眞版）……本社特別撮影

姥捨山（童謡）……野口雨情

同作曲（作曲）……本居長世

アラビヤン・ナイトに就て……（六）

漁夫と惡魔……（七）……秋庭・俊彦

阿螺田と不思議なランプ……（二五）……山野虎市

商人と魔の話……（三九）……霜田史光

魔法の馬……（五七）……水谷まさる

大震災の日……（七一）……

顔中シャボンだらけ……小島政二郎

帝國ホテルの一室……水島爾保布

死んだと思つた……露谷虹兒

白いエプロンを首のまはりに……西條八十

入京の困難……野口雨情

お釜の踊……藤澤衛彦

庭でむすびを……馬場孤蝶

大地震の日に……中島孤島

親の命日に……窪田空穂

美術院の會場で……山本鼎

教會から中野へ……寺内萬治郎

行衛不明のペン……水谷まさる

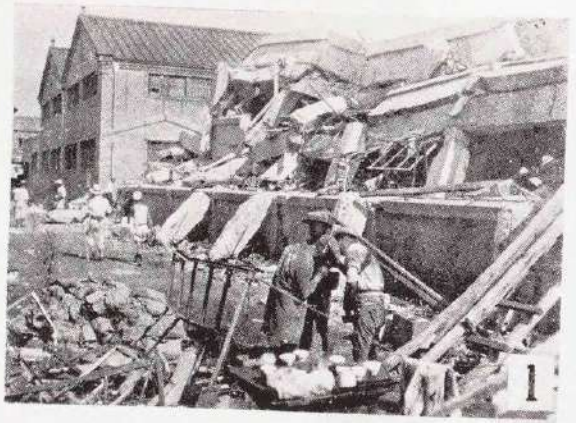
地震嫌ひな私……本居長世

ドン・キホーテ繪物語……（九〇）……水島爾保布

鐵のお城へ（童話）……（九四）……三宅房子

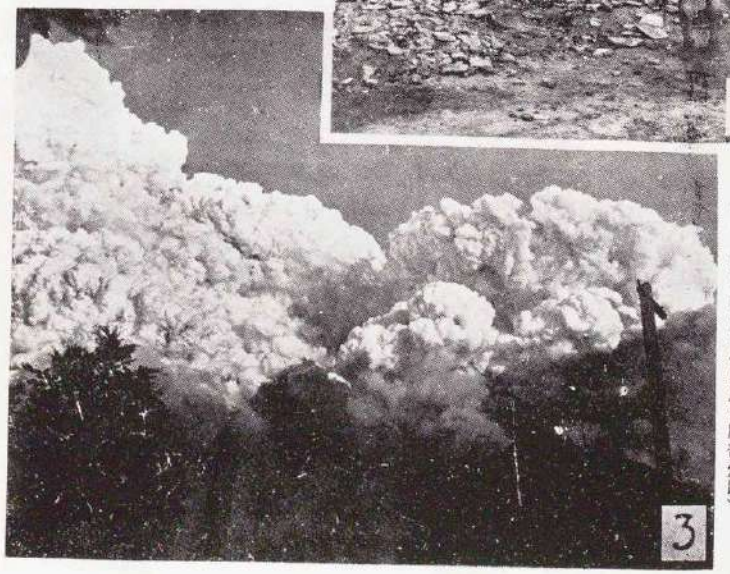
影踏み（童謡）……（九八）……野口雨情

大震災畫報（其一）



(1)金の星印刷所の倒潰（本誌十月號を印刷中であつた小石川區久堅町博文館印刷工場倒潰の一部）

(2)金の星出版部の燒跡（全燒してしまつた上野公園前の金の星出版部燒跡）



(3)帝都を包んだ猛火（帝都は忽ち火の海となつて文化の中心街を燒きつくされて了つた。帝都の大半を焦土としたこの恐るべき猛火の暴威を見よ。幾萬の同胞が逃げ場を失つて火焔に包まれつゝある悲慘の光景を見よ）

"OSAMA CRAYONS"
王様クレイヨン

一度使つたら
また使ひたくなる
クレイヨンは『王様』です
論より證據是非
お試し下さい

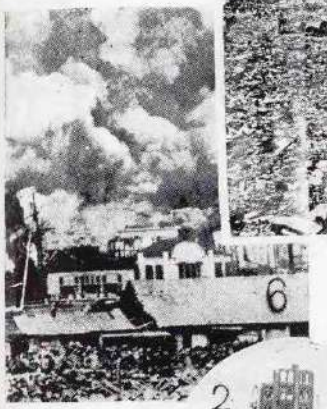
カタログ 御報次第 進呈

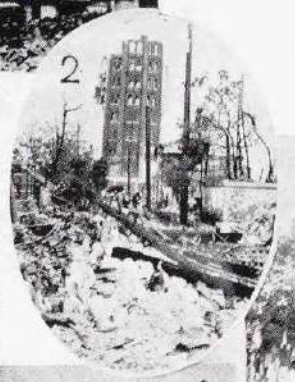
全國文房具店にあり

東京市外西巣鴨町堀内
東京クレイヨン商會

大震災畫報（其二）

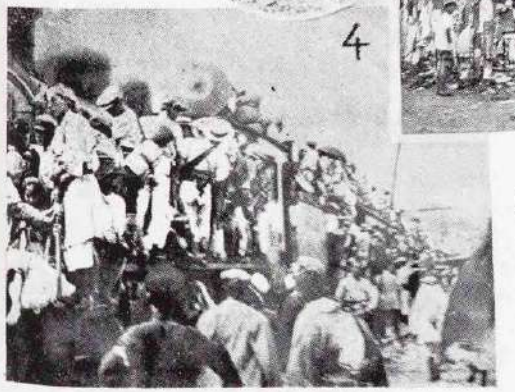
(1)原野燒の田神（神田の燒跡から眺めた）
（社神國靖の段九





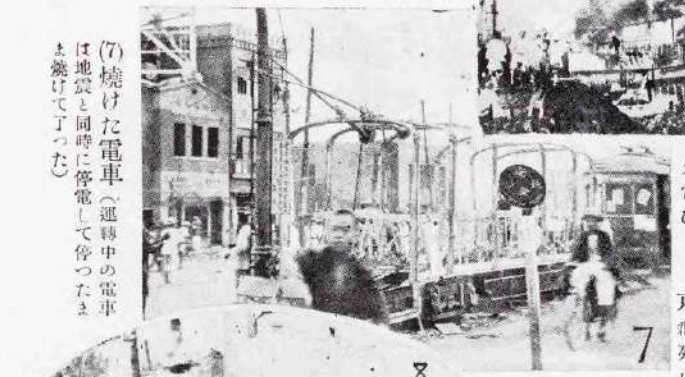
(2)折れたる淺草十二階（東京名所）
一つの二階八階目の窓ガラスは折れて了つた

(3)西鄉銅像　迷ひ子探し
（上野公園西鄉銅像には避難者が紙片に書いた迷ひ子探しの名札を一ぱいぶらさがつてゐる）

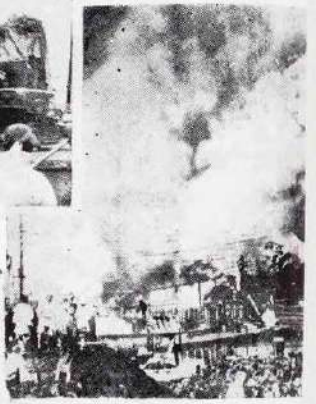


(4)田端驛罹災
（萬千幾ふいと）
（京退避者群がれ列をなす）

(6)淺草公園六區
（六區の活動寫眞館が焼け落ちて）

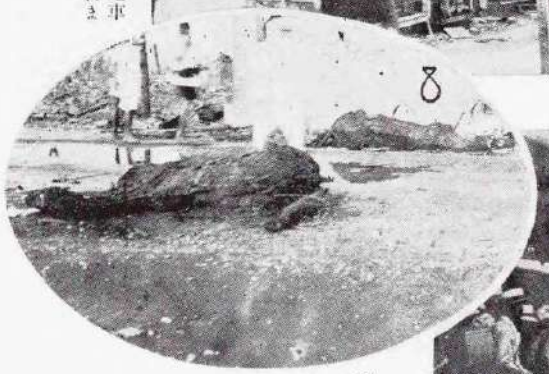


(5)倒潰した丸善
（洋書類輸入で名高い日本橋通りの同店は無慘にもくづれた）



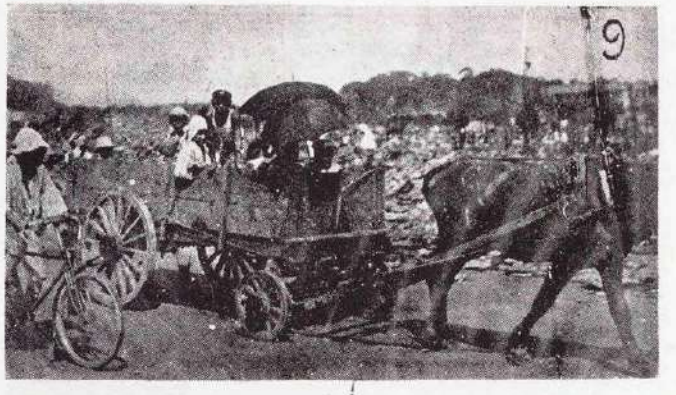
火猛の區
（景光るすさまじい火焰）

(7)燒けた電車
（運轉中の電車は地震と同時に停電して停つたまま燒けて了つた）

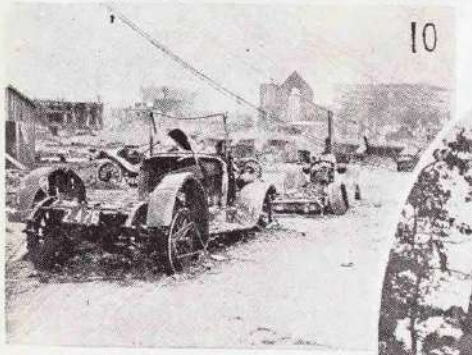


(8)燒け死んだ馬
（荷馬車と一緒に馬は火焰に包まれて狂ひ死に燒け死んでゐる）

大震災畫報（其三）

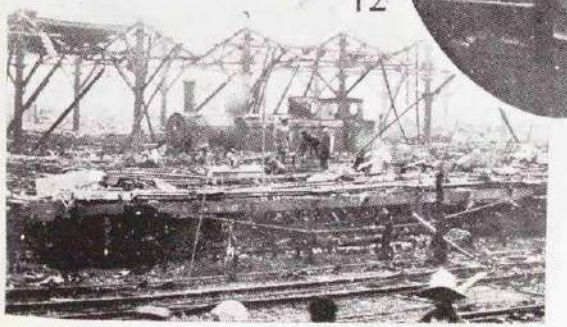


(9)避難者の一部
（避難者の一部はゴミ馬車に乘つて郊外へ避難し）



(10)疾走中燒け出した自動車
（猛火に包まれつつ矢を揚げ逃れまし自動車は燒け疾走中）

(11)首のない大佛
（地震に首が落ちて哀れをとどむ上野公園の大佛）



(12)全燒した上野驛
（見る影も無き上野停車場の燒跡）

蕗谷虹兒先生作（ペン畫繪ハガキ）

エハガキ

震災畫報 ◇第一輯◇

震災畫報 ◇第二輯◇

内容畫題

○生き殘れる者の歎き
○絶望
○落陽
○落ちゆく人々の群
○戒嚴令
○燒野の月
○人燒く煙
○住家なき人々

本編は何人の追從をも許さぬ一大傑作であつて大震災の歴史とともに永く後世に殘るもの

舶來最上アートカード銅凸版二色印刷
定價四枚一組金二十錢

この二編の繪ハガキは、現代版畫界の重鎮、蕗谷虹兒畫伯が、天破れ大地ゆるぐ大震災の中に、踏みとどまり猛火の包圍中にあつて苦心慘憺心血を注ぎ、創り上げられた、血と涙の大傑作であります。

この二編の繪ハガキに發表された、八枚の版畫は、實に、純情なる愛の涙から生れたもののみであつて、美にして聖なるものの最高權威であります、何人と言へど、此れを涙なしで、見る事が出來ませうか。注文殺到で、品切れとならぬうちに、申込みあつて、乞ふ此の際の紀念とされよ。

神田神保町の本店は、此の度の大火災で丸燒けになりましたから、假事務所の方へ御申し込みみ願ひます。

申込所

東京市外千駄ケ谷町七〇七

上方屋平和堂假事務所

振替東京七五一二番

第五號　十月一日發刊

兒童少年文學

毎月一回一日發行
發行部數八萬冊

各部五十頁
定價各十錢

理想的な國語教授の補充教材

▼各地からの皆様の厚き御見舞を深く感謝いたします
▼御同情に勇氣づけられ捲土重來の意氣を以て益々闘ひます
▼本誌は今古東西の大文學を紹介するために生れました讀物です
▼貪る如く讀むあの子供達にウント讀まして下さい、お願ひします

建國以來の大震災にも **休刊せず**

▼悪戰苦闘、定價は依然として一冊十錢で繼續します
▼兒童文學は尋三四年用。少年文學は尋五六年用に御用ひ下さい
▼定價の關係から一切地方書店への取次販賣はいたしませぬ。御手數ですが直接申し込んで下さい。代金は當分郵便爲替に願ひます
▼この際新しく會員の御申込を希望いたします。なるべくば各十部以上の御注文をお願ひします。

高尚、純美、廉價なる子供雜誌

申込所　東京市牛込區山伏町一四　イデア書院内　兒童文學研究會

こ の 大 震 災 中 に 生 れ 出 で た る

最新刊二名著

藝術教育

松原寛著　教育問題叢書第四篇（初版）

目次
一章　藝術研究の方法
二章　藝術の科學的研究
三章　藝術の哲學的研究
四章　藝術の本質
五章　藝術教育論

藝術は人生の花である。造詣深き著者の藝術教育論を吾が學界に捧ぐ

四六版二百頁
定價一圓四十錢
送料八錢

童謡と兒童の教育

野口雨情著　教育問題叢書第五篇（初版）

目次
一　童謡の使命
二　童謡　郷土に生れたもの
三　童謡とは如何なるものか
四　外國に於ける童謡の一瞥
五　詩の無い日本
六　童謡は子供の心
七　童謡の正風とは何か
八　正風童謡擁護
九　童謡と教育
一〇　童謡と教育的指導法
一一　童謡と童話
一二　童謡作法の指導
一三

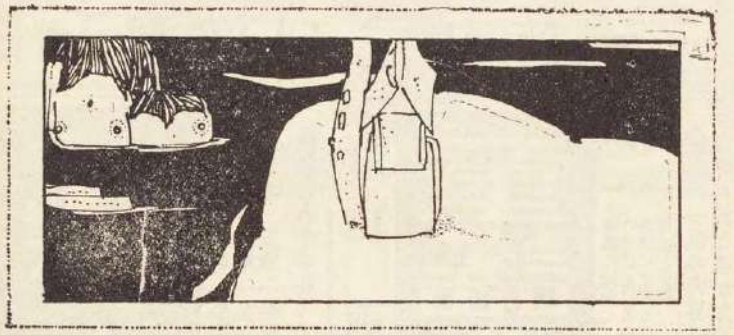
童謡は子供の世界に於ける唯一の宗教である。童謡教育の創始者たる雨情氏の童謡教育論を我が教育界に捧ぐ。

四六版一百廿頁
定價一圓五十錢
送料八錢

◆イデア書院出版◆

金の星

十月號



早稲田學園の開放

新學年開始

學校に行かずに

僅かの學資で勉強したい人は
仕事の傍ら獨學したい

早稲田大學から發行される

早稲田中學講義
早稲田商業講義

のどちらかで勉強したまへ

大學入學、學資金給與
校外生大會夏期講習會出席

などの

大特典がある

内容見本送呈

東京牛込 早稲田大學出版部 電話牛込 三三四三 三三四四 三七四八 三六四五

姥捨山

本居長世作曲

Adagio [♩=104]

うばすてやまにすてられた
やまほどこぎすはかへつても

うばはかへつてこなかーつ
うばはかへつてこなかーつ

Fine

たやまからやまへ

Fine

やまびこは だにから

だにへやまびこーは

rit D.C.al Fine

rit D.C.al Fine

姥捨山

（名所めぐり童謡の八）

野口雨情

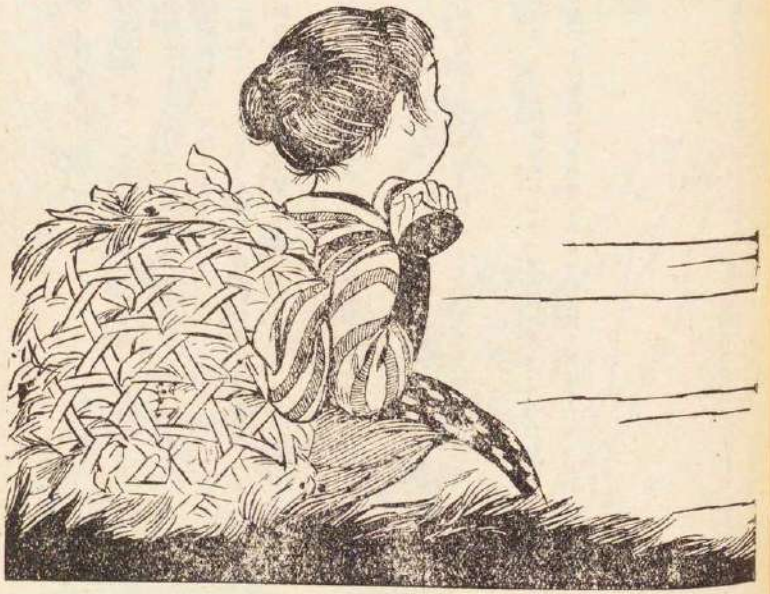
姥捨山に
捨てられた
姥は歸つて來なかつた

山から
山へ
山彦は

谷から
谷へ
山彦は

山時鳥は
歸つても
姥は歸つて來なかつた

（姥捨山は傳說で名高い信州の名所である）



アラビヤン・ナイトに就て

むかし、アラビヤに一人の王様がありましたが、この王様は女といふ者は皆な惡い者だと思つてをりました。王様は毎日新しいお妃をお迎へになりますが、その翌朝になると、必ずそのお妃の首を切つてしまへとお言ひつけになりました。ですから、國中のものが、みんな恐れおのゝいてをりました。

すると、一人の勇敢な婦人があらはれました。この婦人はどうかして、王様のこの惡い習慣を改めさせたいと思つて、ある巧い計略を考へつきました。婦人は王様の御殿へ行つて、王様のお妃にして下さるやうにとお願ひしました。許されてお妃になつた婦人は、その晩から不思議なお話をはじめました。そして、朝になると、またその先を聞いて下さるやうにといつて、お話がすつかり濟んでしまふまでは、どうか首を切るのを待つて下さいとお願みました。

そこで、毎晩々々、丁度千一夜の間、婦人は新しいお話をしました。しかし、いよ〳〵お話が終つた時、王様はすつかりこの婦人が好きになつてしまつて、この婦人を深く愛するやうになりました。そして、その後長い間、この婦人をお妃にして幸福に暮したといふ事です。

さて、この『アラビヤン・ナイト』誌に收められたお話は、その王様がお妃から千一夜の間お聞きになつたお話の中で最も面白いものばかりを集めたものです。この幾つかのお話は、その昔アラビヤの王様を喜ばせたやうに、必ずや皆さんを喜ばせずには措かないでせう。

漁夫と惡魔

秋庭俊彦

一

一人の年とつた漁夫がありました。自分とお神さんと三人の子供たちとが、やつとのことで、暮らしを立てゝゐるほど貧乏でありました。毎日、朝早くから漁に出かけて行きましたが、一日に四度しか網を打たないことに自分で定めてをりました。或る朝、月明りで濱へ出て眞裸體になつて網を打ちました。波打際へひき寄せて見ると、網が大へんに重いので、これは澤山魚がとれたに違ひないと思つて、喜んでをりました。ところが、ひき上げて見ると、魚は一匹もとれずに、驢馬の死骸がかゝつてゐましたので、漁夫はがつかりして了ひました。

こんな忌々しい獲物に漁夫は腹を立てながら、驢馬の死骸のおかげで方々破れたところを繕つて、もう一度網を打ちました。今度もまた大へんに網がひつ張られるので、さかなが一ぱいはひつたのにちがひないとおもひました。ところが、魚は一匹もとれずに、小砂利や粘土のつまつた破れ籠がかゝつて來ましたので、漁夫は悲しくなりました。

『神樣！　どうぞ私をいぢめないで下さい、貧乏な私を苦めないで下さい。私は暮らしを立てるために、かうして漁をしてゐるのでございます。それだのに、あなたは、私を死ぬやうな目に會はせてゐらつしやいます。私は漁をする外には何にも仕事がないのでございます。私は一生懸命になつてをりますのに、妻や子供たちに食べさせるものが、少しもないのでございます。』

漁夫はこんな愚痴をこぼしながら、壞れた籠を投げすてゝ、網の泥を洗つてから、三度目の網を打ちました。ところが、今度も石や貝殼や泥のほかには何にもはひつて來ませんでした。漁夫はもう氣がぬけたやうにぼんやりしてしまひました。でも、朝日

がのぼりはじめた時、神樣にお祈りをあげることは忘れませんでした。お祈りの後で、漁夫は神樣にかう云つてお願ひしました。

『神樣、私が一日に四度しか網を打たないことをあなたは御存じです。私は今日はもう三度打ちました。でも、魚は一匹もかゝりません。私はあと一べんしか打つことが出來ないのでございます。どうぞ神樣、あなたがモーゼにお與へになりましたやうに、私に善い獲物をお與へになつて下さいまし。』

この言葉を終ると、漁夫は四度目の網を打ちました。ところが、又もや魚のかはりに、今度は黃銅の壺がかゝつて來ました。重さをはかつて見ると、中には何か入つてゐさうでした。それはびつたり蓋がしてあつて、その上に鉛で封がしてありました。それを見ると、漁夫は喜んで、

『これを鑄物屋へ賣つて、そのお金でお米を買はう。』と思ひました。

漁夫は壺をぐる〳〵廻して見たり、何か音でもするかと搖つて見たりしました。が何の音もしませんでした。鉛で封のしてあるところから考へると、何か立派なものが入つてゐるにちがひありません。そこで、漁夫はナイフを取出して、蓋をこぢ開けました。そして急いで壺の口を下へ向けて見ましたが、何一つ出て來ませんので、漁夫は呆れてしまひました。それから眼の前にそれを据ゑて、ぢつと眺めてをりましたが、すると、壺の口から濃い煙がぼう、つと出て來ましたので、思はず二三歩跳びのいた程漁夫はびつくりしました。

煙は雲の上までのぼつて、濱邊から海へかけて、ぼう、つとひろがつて行きました。そして壺の口から出きつてしまふと、今度はまた、だん〳〵と一つに塊つて、それが巨人の二倍もあるやうな丈の高い惡魔の姿になりました。こんな圖體をした恐ろしい怪物を見ると、漁夫はあはてゝ逃げ出さうとしました

が、あんまり臆をつぶしたので、一歩も動くことが出來ませんでした。

『ソロモン、大豫言者のソロモン、どうぞお許し下さい。私はもうあなたのお言葉には叛きません。あなたのお命じになる通りにいたします。』と惡魔は直ぐに云ひました。

この言葉をきくと、漁夫は勇氣をとり直して、

『化物、お前は何を云つてるんだい。豫言者ソロモンはもう

千八百年も昔に死んで、今は世の終りが來てゐるんだ。一體お前はどうして、この壺の中に閉ぢこめられてゐたんだ。』と惡魔に向つて云ひました。

『もつと丁寧に物を云へ、俺を化物などと無禮なことを云ふな。』と惡魔は怖い顏付をして云ひました。

『さうか、ぢや、もつと丁寧に云はう。仕合せ者の梟とでも云へばいゝのかね。』

『もつと丁寧に云へ、俺は今お前を殺してやるから。』

『えゝつ、私を殺すつて……どう云ふわけで？　私は今お前を壺から出してやつたんぢやないか。お前はそれを忘れたのか。』と漁夫は云ひました。

『それは覺えてゐる。けれども、そんな事でお前を殺さずにおくわけには行かないんだ。俺がお前に與へてやる恩惠は、たつた一つあるだけだ。』と惡魔は云ひました。

『それは何だね。』と漁夫はきゝました。

『お前はどんな死方がしたいか、俺はお前の好きな通りにして殺してやると云ふことだ。』と惡魔は答へました。

『でも、私はお前にどんな惡いことをした。私はお前を助けてやつたのに、お前の返禮はそんなことなのか。』

『俺には外にどうしてやりようもないんだ。いまその譯を話してやるから聞いてゐろ。』と惡魔は云ひました。

『俺は天帝の思召に叛いた惡魔の一人なんだ。ほかの惡魔は、大豫言者ソロモンに征服されて、ソロモンの奴隷になつてしまつたが、サカルと俺とは決して罪に服さうとはしなかつたのだ。そしてソロモンは俺を捕縛するために、長老バラキアの息子のアサフを俺のところへ差し向けたんだ。アサフは俺を捕まへて、力づくでソロモンの前へ俺を連れて行つたのだ。

『ダビデの息子のソロモンは、俺の惡い行ひを止めさせようとして、俺に罪に服せと云つたが、俺はきつぱりとそれを跳ねつけて、意氣地なく奴隷になる位なら、一層貴樣に憎まれた方がいゝと云つてやつたのだ。そこでソロモンは、俺を懲らしめるために俺をこの銅の壺に閉ぢこめて、破つて出られないやうにこの鉛の蓋へ、神樣の名を彫つた封印を自分で押したのだ。そして自分の奴隷にした惡魔の一人に壺をわたして、こゝの海へ投げこましたのだ。

『初めの百年の間、俺はこの百年が過ぎないうちに俺を壺から出してくれる者があつたら、その人を大金持ちにしてやらうと思つてゐた。けれども、その百年は經つてしまつて、誰も俺を助け出してくれなかつた。次の百年の間、もし俺を自由にしてくれる人があつたら、俺は世の中の寶と云ふ寶をその人のものにしてやらうと思つたのだ。が、それも無駄になつてしまつた。三百年目に、俺は權力の偉い坊さんに助けて貰ひたいものだ、さうしたら妖精になつて、始終その坊さんの傍についてゐて、一日に三つだけはどんな事でも思ひを叶へてやらうと思つてゐた。それだのに、その百年も前と同じやうに過ぎ去つてしまつて、俺は壺に閉ぢこめられた儘でゐたのだ。何時まで經つても出ることが出來ないので、俺はたうとう氣狂ひのやうに腹を立てて、この後若し俺を壺から出した奴があつたら、俺は容赦なくそいつを殺してやらう、たゞその死方だけをそいつの好きなやうにしてやらうと云ふ誓ひを立てたんだ。それで今日お前が俺を出してくれたから、俺はお前に好きな死方をさせてやらうと云ふのだ。』

この話をきくと、漁夫は恐ろしくなりました。

『こんな恩知らずなものを助けてやつたのは、何と云ふ不仕合せだらう。お前さん、お願ひだから、そんな無法な、理窟に合はない決心をお止めにしてくれ、私を許してくれ、さうすりや天もお前さんを許して下さるだらうよ。お前さんが私の命を助けて呉れゝば、天もお前さんにいろ〳〵な責苦を取りのけて下さるだらうよ。』と漁夫は云ひました。

『いゝや、俺はどうしたつてお前を殺さなけりやならないのだ。さあ、どんな死方をしたいか云ふがいい。』と惡魔は云ひました。

惡魔が堅く決心してゐるのを見ると、漁夫は自分のことよりは、三人の子供たちのことや、自分が死んでからの可哀相な有樣やを思つて、泣き出さないばかりに云ひました。

『私はお前さんを助け出してあげたんだから、それを思つて、私に慈悲をかけてお呉れ。』

『だから俺はさつきから云つてるぢやないか。お前が助けてくれたから、その代りにお前を殺してやらなければならないんだ。』と惡魔は云ひました。

『善いことをした返禮に、惡いことをしようと云ふのは、あんまり變ぢやないか。善いことをしてくれた人に、惡いことをして返す法はないと云ふ諺があるぢやないか。』と漁夫は云ひました。

『何を愚圖々々云つてるのだ。そんな理窟を云つたつて、俺の誓つたことを止めさせるわけにはイかないぞ。さあ、早く、どんな死方がいゝのか、つて見ろ。』と惡魔は云ひました。

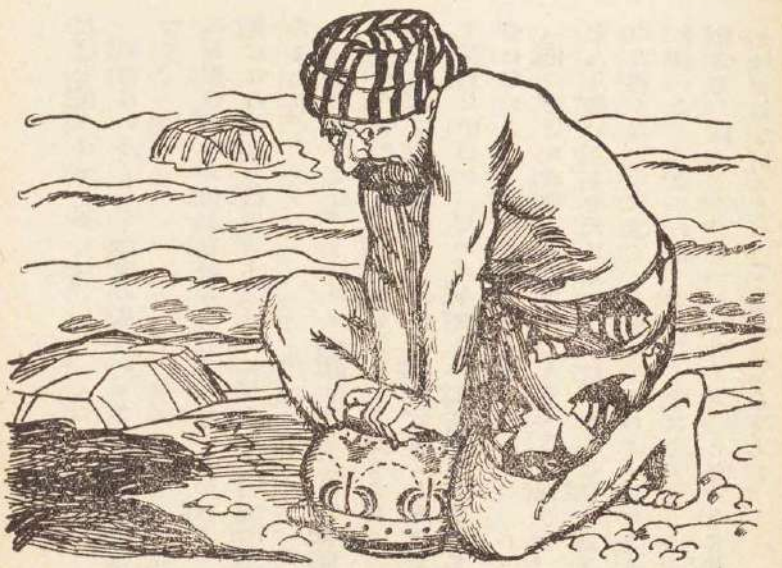
せつぱ詰まると、いゝ考へが浮ぶものです。漁夫は一つの計略を思ひつきました。

『ぢや、どうしても殺されなけれやならないのなら仕方がない。だが、私は死ぬ前に、お前さんに一つ訊きたいことがある。豫言者ソロモンの封印にある神樣の前に誓つて、正直に答へてくれ。』と漁夫は云ひました。

惡魔は神樣の名が出たので、ぶる〳〵と身を顫はしましたが、

『よし〳〵何でも訊くがいゝ。だが、早くしろ。』と云ひました。

『ぢや訊くが、私はお前さんが、本當にこの壺のなかに入つてゐたのかどうか、知りたいんだ。お前さんはそれが嘘でないことを神樣に誓ふかね。』
『神樣に誓つて、それは嘘ぢやない。俺はこの壺の中に入つてゐたんだ。』
『だが、どうもお前さんの云ふことは本當とは思へないよ。こんな壺ぢやお前さんの片足だつて入りさうもないのに、お前さんの體のはひるわけがないからな。』
『でも俺はすつかり入つてゐたんだ。神樣に誓つても、お前は本當にしないのか。』
『お前さんが私の眼の前で壺へはひつて見せてくれなければ、私には信じられないよ。』と漁夫は云ひました。
すると、惡魔の姿は不意に消えてなくなりました。そして煙になつて、前の時のやうに濱邊から海へかけてひろがりましたが、やがて又、一つに塊つて、靜かにゆら〳〵しながら壺の口からはひつて行きました。壺のそとにすつかり煙が見えなくなつてしまふと、直ぐに、一つの聲が云ひました。
『さあ、この通り俺は壺の中へはひつたぞ。これでもお前は嘘だつて云ふのか。』
漁夫は惡魔に答へるかはりに、鉛の蓋を手にとるが早いか、急いで壺の口をふさぎました。
『惡魔奴、さあ今度は、お前が私のお慈悲にすがつて、どんな死方をしたいか云ふ番だぞ。だが、私は元通りこいつを海の底へ放りこんでやることにしよう。そして私はこの砂山に小舍を建てゝ、そこを住居にしながら、助けてくれた人を殺さうと思つてゐる。お前のやうな惡い奴をほかの漁夫がひき上げないやうに、張番することにしよう。』と漁夫は云ひました。
惡魔はかつと腹を立つて、一生懸命にもう一度壺から出ようとしました。が、ソロモンの封印が邪魔



になつて、どうしても出ることが出來ません。かうして今度は漁夫の方が勢ひが強くなつたので、惡魔は怒つてゐない風をする方がいゝと考へました。
『漁夫さん、そんなことはしないで見れよ。さつき俺が云つたことは、ほんの笑談だ、だから眞面目にとつてくれちや困るよ。』と惡魔は急に優しい調子になつて云ひました。
『おい、惡魔！　たつた一分ばかり前には、お前は惡魔の中でも一ばん強かつたが、今度はすつかり弱い奴になつてしまつたんだな。お前の狡猾な云ひ草なんぞ、うつかりきいて堪るものか。先のとほり海へ投げこんでやるから、さう思へ、お前が云ふやうに今まで何百年となくあすこに沈んでゐたのなら、これから又、この世の終りのお審きの日が來るまで平氣でゐられるだらう。私は命を助けてくれとお前にたのんだのに、お前はきいてくれなかつた。だから私は、お前が私にしたやうにして返してやるん

だ。』と漁夫は云ひました。
惡魔はいろ〳〵と漁夫の氣にいりさうなことを云つて、
『お願ひだから俺を壺から出してくれ。その代り、俺はなんでもお前の云ふとほりになるから。』とたのみました。
『お前は嘘つきだ。うつかりお前の云ふことを本當にしやうものなら、私は命を失くしてしまふだらうよ。お前は私に恩があるのに、私の云ふことをきいて呉れなかつた。だから今度は、私の方でもきいてやれないよ。』と漁夫は答へました。
『俺の善いお友達の漁夫さん。もう一度お願ひだ、そんな酷いことを云はないでくれ。そんな仇を返すのは善くないと云ふことを考へてくれよ。惡いことを善いことで返すのは、立派なことだと云ふことを思つてくれよ。昔、イママがアテカにしたやうに俺をいぢめないでくれ。』と惡魔は云ひました。

『イママはアテカにどんなことをしたんだ。』と漁夫はきゝました。
『その話をきゝたけりや、壺の口をあけてくれ。こんな狹苦しい牢屋の中で、面白く話をすることなんぞ出來やしない。そとへ出してくれたら、すつかり話して聞かせるから。』
『いゝや、外へは出さないよ。いくら云つたつて駄目だ。さあ、もう海へ投げ込むことにしよう。』と漁夫は云ひました。
『どうか、もう一言俺の云ふことをきいてくれ。俺は決してお前に害をしないことを約束するよ。それどころか、お前がお金持ちになるやうにして上げるから、俺を助けてくれ。』と惡魔は云ひました。
貧乏の暮らしから逃れたいと思つてゐる漁夫には、この言葉はきゝめがありました。
『今お前の云つたことを神樣の前に誓ふなら、壺の口をあけてやらう。お前だつて、まさかその誓ひまで破りもしまい。』
惡魔が誓ひをたてましたので、漁夫は直ぐに壺の口をあけてやりました。すると、濃い煙が出て來て前のやうに惡魔の姿になりました。ところが、惡魔はいきなり壺をとるが早いか、海に投げこんでしまひました。この有樣を見ながら、漁夫はあつけにとられてをりました。
『惡魔、何をするんだ。お前は今の誓ひを守らないのか。』と漁夫は云ひました。
惡魔は漁夫がびく〳〵してゐるのを笑ひながら、
『いや、怖がることはない。俺の安心のために壺を捨てたんだ。俺の嘘をつかない證據を見せてやるから、お前の網をもつて、俺について來い。』と惡魔は漁夫の先に立つて歩き出しました。
漁夫は網をかついで、まだ少し怪訝に思ひながら、後からついて行きました。二人は町を通り過ぎて、或る山の頂上へ行きました。そこから廣々とした野原へ下りて、間もなく、四つの丘にかこまれた大きな池のところへ出ました。
『こゝへ網を打つて、魚をとるがいゝ。』
池の縁へ來ると、惡魔は云ひました。
池の中には、數限りなく魚のゐるのが見えました。そして不思議なことに、その魚には四色ありました——白と、赤と、青と、黄色なのです。漁夫はさつそく網を打つて見ました。すると一色のが一匹づゝとれました。今まで見たこともないやうな立派な魚なので、漁夫はたゞ驚いてをりました。そしてきつと高い値段で賣れるにちがひないと思つて、大へんに喜びました。
『この魚を王樣のところへ持つてつて上げろ。さうすれば、お前は生れて初めて見るほど澤山のお金が貰へるだらう。お前はこれから毎日、この池へ漁に來るがいゝ。だが、一日に一ぺんしか網を打つてはいけない。さうしないと、後で後悔するやうなこと

が出來るぞ。いゝか、私の云つたことを忘れるな。』

かう云ふと、惡魔はとんと地面を踏みました。と、地面が口をあいて、惡魔の體がすつとはひつてしまひました。

漁夫は惡魔の云つた通りにしようと思ひましたので、もう一度網を打ちたいのをこらへて、四匹の魚を下げて町へ歸り、直ぐその足で王樣のお城へ行きました。

王樣はその四匹の魚を御覽になると、大そう驚

かれて、一つ〳〵ひつくり返して御覽になつては、何と云ふ立派な魚だらうとお褒めになりました。それから侍從をお呼びになつて、

『希臘王から贈物に下すつた美しい女料理人に料理させよ。これほど立派な魚なら、味もさぞ美味からう。』と仰しやいました。

侍從は自分でその魚を料理番のところへ持つて行きました。

『こんな珍らしい魚が王樣へ獻上になつたから、

さつそく料理するやうに。』と侍從は云ひました。

侍從が王樣の前へ戻つて行きますと、王樣は、金貨を四百枚漁夫に與へてやれとお命じになりましたので、侍從はそれだけのお金を漁夫にわたしました。

生れてからまだこんな澤山のお金を見たことのない漁夫は、たゞ恍惚としてしまひました。そのお金でお神さんや子供たちの食物を買つて、やつと贋金でないことが分るまで、夢ではないかと思つてゐました。

さて、王樣の料理番は、魚を綺麗に洗つてから、油鍋に入れて、火にかけました。片側がすつかり揚つたと思ふ時分に、それを裏がへしました。するとその途端に、臺所の壁がさつと兩方へ開いて、立派な身裝をした、驚くほど美しい、若い女がはひつて來ました。その女は花模樣の襦子の服を着て、耳に耳環をさげ、大きな襟飾をし、眞珠や紅玉をちりばめた金鎖をかけて、手にはマートル樹の小枝をもつてゐました。料理番があつけにとられてゐる間に、彼女は油鍋に近づいて、小枝のさきで魚の一つを打ちながら、

『魚よ、魚よ、お前はお前の役目をしてゐるかい。』

と云ひました。

魚が何とも答へないので、女はその言葉を繰りかへしました。すると四匹の魚は、一緒にそろつて頭を持ちあげながら、

『お前が勘定を濟ましたら……お前が借りを返したら、私達もお前に返してやらう。もしお前が逃げれば、私達の勝ちだよ。』と云ひました。

魚がかう云ひ終るが早いか、女は油鍋をひつくり返しました。そして又壁の間にはひりますと、忽ちそれがもとの通りになりました。

料理番はこの有樣に仰天してをりましたが、少したつて正氣にかへると、煖爐の上に落ちてゐた魚を手にとつて見ました。それはまるで石炭のやうに眞黑になつて、王樣に差し上げることが出來なくなつ

てをりました。料理番はひどく困りぬいて、おろおろ泣き出しました。

『あゝ、どうしたらいゝだらう。あんな妖女のことを申し上げたつて、本當にはなさらずに、お怒りになるにちがひない。』

かうして思惑々々してゐるところへ、侍從がはひつて來て、魚の料理は出來上つたかときゝました。妖女の話をしますと、侍從は驚いてをりましたが、王樣には一言も云はずに、急いで漁夫のところへもう一度魚をもつて來るようにと使ひを出しました。

『道程が遠うございますから、今日中には間に合ひませんが、明日になれば早く持つてまゐります。』と漁夫は云ひました。

漁夫は夜の明けないうちに家を出て、池のところへ行きました。朝早く網を打つて、前のやうに四匹を一匹づゝとると、約束の時間に王樣の侍從のところへ屆けました。侍從は自分でそれを臺所へ持つて行つて、料理番と二人つきりで臺所に閉ぢこもりました。料理番は魚を綺麗に洗つてから、前の日と同じやうに油鍋に入れて、火にかけました。片側が揚つた時分に、料理番がそれを裏がへしますと、その途端に、臺所の壁がさつと開いて、手に樹の枝をもつた若い女が入つて來ました。そして魚の一つを打ちながら、前の日と同じことを云ひますと、魚も前と同じ答へをしました。

四匹の魚が答へを終るが早いか、若い女は小枝のさきで油鍋をひつくり返して、壁の間から何處かへ姿を隱しました。侍從はその有樣を眺めてをりましたが、

『どうも不思議なことだ。これは王樣へ申し上げずにおくことは出來ない。』と云ひました。

侍從が王樣に妖女のことを申し上げると、王樣はひどく驚かれて、今度は御自分でそれを見たいと仰しやいました。そして直ぐに漁夫をお呼び出しにな

つて、前と同じ魚をとつて來てもらひたいとお云ひつけになりました。

『三日お待ち下されば、きつと持つてまゐります。』と漁夫は云ひました。

王樣のお許しが出ると、漁夫は直ぐ池の緣へ行きたつた一網で四色の魚をとつて、急いで王樣のところへ持つて行きました。王樣は思つたよりも早く眉いたことを大そうお喜びになつて、漁夫に金貨を四百枚下さいました。王樣は侍從に向つて、油鍋といつしよにその魚を自分の部屋に持つてくるようにとお命じになりました。そして侍從と二人つきりで、自分のお部屋へ閉ぢこもりました。侍從が魚を綺麗に洗つてから、油鍋に入れて、火にかけました。片側が揚つた時分に、侍從がそれを裏がへしますと、その途端に、部屋の壁がさつと兩方へ開いて、若い女のかはりに、奴隷の服を着た、一人の黑ン坊がはひつて來ました。その男は巨人のやうに大きな體をして、手に大きな緣の杖をもつてゐました。黑ン坊は鍋のそばへ進み寄ると、杖の尖で魚の一つを突つきながら、『魚よ、魚よ、お前はお前の役目をしてゐるか。』と恐ろしい聲で云ひました。

すると、魚は揃つて頭を持ちあげながら、

『お前が勘定を濟ましたら……お前が借りを返したら、私達も返してやらう。もしお前が逃げれば、私達の勝ちだよ。』と云ひました。

魚がかう云ひ終るが早いか、黑ン坊は部屋の眞中へ油鍋をひくくり返して、魚を石炭にしてしまひました。そして凄いやうな勢ひで壁の間へ後戻りすると、すつと何處かへ消えて行きました。

『こんなことを見ては、わしは安心してはゐられない。この魚には、何か恐ろしいことがあるにちがひない。』と王樣はおつしやつて漁夫をお呼びになりました。

『お前のもつて來た魚は、わしには大へんな心配の

種になつた。お前は何處であれを捕つて來たのぢや。』とおきゝになりました。

『こゝから見えるあの山の向ふの、四つの丘に圍れた池でとつたのでございます。』と漁夫は答へました。

『お前はその池を知つてをるか。』と王樣は侍從におきゝになりました。

『いゝえ、存じません、そんな池のことは聞いたこともございません。』と侍從は答へました。

お城から池まで、どの位道程があるかと漁夫に尋ねて見ますと、三時間で行かれると云ふことでした。

そこで、夜が明けると、王樣はお城中のものに馬に乘れとお命令じになり漁夫に案内をお云ひつけになりました。みんなが山を下つて行きますと、誰も今まで見たことのない廣々とした野原へ出ました。そしてたうとう池のところへ着きました。それは漁夫が云つたとほり、四つの丘にかこまれてをりました。その水はまるで水晶のやうに透きとほつてゐて、漁夫がお城へ持つて來たのと同じ四色の魚が澤山見えてをりました。

王樣は池の縁に立つて、暫くの間その魚の立派さを褒めてお出でになりましたが、町からこれ程近いところにある池を、今まで誰も知らずにゐるわけはない、誰か知つてゐるものはないかと、大臣達や大勢の臣下にお尋ねになりました。が、臣下たちは、誰れも今まで知らずにをりましたと答へました。

『みんながさう云ふなら、誰も知らなかつたにちがひない。わしはますゝ心配になつて來たから、どうしてこの池が出來たか、どうしてこんな四色の魚が棲んでゐるのか、そのわけが分るまで城へは歸らぬつもりぢや。』と王樣は仰しやいました。

かうして王樣は、すぐ陳屋を造るようにと臣下の者にお命じになりました。間もなく、その池の堤に假舍が建てられ、天幕が張られました。（つゞく）

阿螺田と不思議なランプ

山野虎市

の或る大きな都に、麻生多布といふ貧乏な仕立屋が住んでゐましたが、夫婦の間に、阿螺田といふ、たつた一人の息子がありました。麻生多布は、仕事好きで、性質のよい人でしたが息子の阿螺田は、怠け者で、毎日、朝から晩まで、惡い友達と一緒になつて、街で惡戯をして遊んでばかりゐました。

背丈けが延びて、何か仕事をしなければならぬ年頃になつても怠け者の阿螺田は、別に何をしようとも思はず、ぶら〳〵遊んで許りゐましたから、お父さんは、自分の獨り子の行末を思つて、心配で堪りませんでした。困り切つたお父さんは、阿螺田を、家の仕事場に連れて來て、裁縫を習はせようとしましても、阿螺田は笑ひながら、後から追つかけて來る親達を振り切つて、犬のやうに早く駈け出して、何所ともなく逃げてしまふのでした。

『あゝ、どうすればよいのかナー。』と麻生多布は息子のことを考へて何時も深い溜息を漏らしましたがその心配が因となつて、麻生多布はたうとう重い病氣になり、幾日もたたない中に可愛い妻と、怠け者の獨り息子を後に殘して死んでしまひました。

後に殘された麻生多布の妻は、小さな店を人手に渡してしまひ、人から頼まれる着物を縫つて、やつと自分と阿螺田の生活を立てました。

或日、阿螺田は何時もの通り、仲間と一緒に街で遊んでゐました時、何所からともなく、丈の高い色の黑い老人が出て來て、ぢつと子供等の遊戯を見てゐましたが、遊戯が終ると、老人は阿螺田の方を向いて、こちらへ來いといふ合圖をいたしました。

『お前さんの名は何といふのかね？』と老人は阿螺田に向つて問ひました。――この老人は大層親切に見えましたが、眞實は、アフリカの魔法使だつたのです。

『私の名は阿螺田だが。』と阿螺田は、この老人は一體誰だらうと怪しみながら答へました。

『お前さんのお父さんの名は何といふのかね。』

『お父さんは仕立屋で、麻生多布といひましたが、もうずつと前に死んだのです。』と阿螺田が答へますと、その年老つた魔法使は俄かに泣く眞似をして、

『あッ！お前のお父さんの麻生多布は私の兄弟だ。だからお前は私の甥で、私はお前の伯父にあたるのだ！』といつて、阿螺田に抱きつきました。

『私は今日今から、お前の家へ行くから、お前はこれから歸つて、さうお前のお母さんに話しておくれ。それから、これはほんの少しの送り物だが、お前のお母さんに上げておくれ。』

かう老人はいつて、金貨を五ッ、阿螺田に渡しました。

阿螺田は大急ぎで家に歸り、今まで知れずにゐた伯父さんの話をお母さんにいたしましたが、

『これは何かの間違ひにちがひない。お前には伯父さんが無かつた筈ですから。』とお母さんがいひました。併し金貨を五ッも呉れたのだから、伯父さんではなくても、親類の人に違ひないと考へまして、お母さんは御馳走をこしらへて、不思議なお客樣を待ち受けました。

間もなく魔法使は、いろ〳〵の果物と、樣々の旨しい食物を持つてやつて參りました。

『氣の毒な私の弟の話をして下さい。』と魔法使は阿螺田とその母を腕で抱へながらいつて、

『死んだ弟は何時も、何處に坐つてゐたのです。』と周圍を見廻しました。

阿螺田のお母さんが、死んだ良人の何時も坐つてをつた長椅子を指さしますと、魔法使はいきなり、その椅子に跪いて、啜り泣きを始めました。

阿螺田のお母さんはこの樣子を見て、すつかり感心してしまひ、この老人は眞實の伯父に違ひないと

思ひました。殊に阿螺田にいろ〳〵と、親切な言葉をかけるのを見ては、もう、てつきり伯父に違ひないと思ひ込んでしまひました。

『お前はどんな仕事をしてゐるのかね。』

と魔法使が阿螺田に訊ねますと、お母さんがそれを引き取つて、

『あのう、これは街で毎日遊ぶ外に、仕事はしないのでございます。』と申しました。

これを聞いて魔法使は眉に皺をよせて、頭を振りましたが、阿螺田は、恥づかしくなつて頭を垂れました。

『阿螺田、お前は直ぐに商賣を始めないといけない。一ッ店を開いてはどうかね。私は店を買つて、絹や反物を澤山仕入れてやるから。』

かう魔法使がいつた時に、流石の怠け者の阿螺田も躍り上がらんばかりに喜びました。

次の日、贋物の伯父は、阿螺田を連れて町に出懸け、阿螺田によく似合ふ立派な着物を一襲買つてやり、それから二人連れで、町中を見物して歩きました。

次の日も、魔法使は阿螺田を連れて出かけましたが、今度は綺麗な花園を通つて、町から離れた廣々とした田舍へ參りました。

二人は、遠くまで歩いて參りましたが、阿螺田はその中に段々と疲れ始めました。しかし、魔法使は

阿螺田に菓子や果物を與へ、不思議な面白い話をして聞かせましたから、阿螺田はすつかり夢中になり足の疲れたのも忘れてしまひました。

たうとう、二人は二ッの山に狹まれた谷間に參りましたが、そこで魔法使は足を止めて、

『もう休んでよい。此所が探してゐた場所だ。阿螺田、火を燃やすから枯枝を集めて來てくれ。』といひました。

阿螺田は吩咐けられた通り、その邊に散らばつてゐる枯枝を集めて、積み重ねますと、魔法使はそれに火をつけました。

火が、どつと燃え上がつた時に、魔法使は、勿體らしく、奇妙な粉を火にふりかけ、口の中でお經の文句を唱へました。すると忽ち、足の下の地面が、地震のやうに搖れ、遠方の雷鳴のやうな音が聞えました。と俄かに目の前の地面が二ッに裂けて、輪のついた平たい大きな石が現れました。

これを見た阿螺田は、吃驚して、もと來た途の方へ駈け出さうとしましたが魔法使は、腕を延ばして、阿螺田の襟髪を捕へ、いきなり地面に撲ぐり倒しました。

『伯父さん、どうして私を撲ぐるのです。』と阿螺田は泣き出しますと、

『お前は、私のいふ通りすればよいのだよ。その石を御覽、その石の下には寶物があるのだが、私のいふ通りにすれば、その寶物が此方の物になるのだ。』と魔法使がいひました。

逃げかけてゐた阿螺田は寶物と聞いて、今度は躍り上つて喜び、先つきの恐れも忘れてしまひました。そして魔法使がいふ通りに、輪に手を懸けて、その石を易々と引き上げました。すると老人は、

『内を御覽。下の方に行く石段が見えるだらう。お前はその石段を降りて行くのだよ。すると石段を降りてしまつた所に三ッの大廣間があるが、その大廣間を通りぬけて行くのだ。しかし、お前の着物が何かに觸はると、お前は直ぐに死ぬのだから、用心しないといけない。それから大廣間を通りぬけると、祭壇があつて、その中に灯のともつたランプが一ッ立つてゐるが、お前はそこで、ランプの灯を吹き消して、その中の油を捨てゝしまひ、ランプだけ持つて歸つて來るのだ。分つたかい。』といつて、阿螺田の指にお守りの指輪を嵌めてやり、石の下へ這入るやうにいひつけました。

阿螺田はいひつけられた通り、石段を下つて行きましたが、何も彼も老人がいつた通りでした。

阿螺田は大廣間を通りぬけ、果樹園を通りぬけてランプの光の輝いてゐる祭壇に參りました。そこで阿螺田はランプの灯を消して、油を外に流がし出した上、そのランプをしつかりと着物の下に隠しました。そして周圍を見廻しましたが、

「アッー」

といつて吃驚しました。といふのは阿螺田は今まで、夢にも、このやうな美くしい花園を見たことが無かつたからです。

樹の枝からは、水晶のやうに透き通つた木の實や紅や、青や、紫や、黄やの木の實が垂れ下がつてゐる許りでなく、樹の葉が皆な金色、銀色に照り輝いてゐるのでした。阿螺田は呆氣にとられながら、なほよく見てゐますと、この木の實は、眞實の木の實ではなくて、皆な金剛石、紅石、碧玉、青玉といふやうな寶玉でした。で阿螺田は出來るだけ、澤山、この寶玉の果實をもぎ取つて、隠しにねじ込んで、歸つて來ました。

熱心に、上の方から石段を覗き込んでゐた魔法使は、阿螺田の歸つて來た姿を見て、

『さア、ランプを呉れ！』

と、手を延ばしました。

『外に出るまで待つて下さい。』と阿螺田が答へますと、老人は嚇と怒つて、

『直ぐ、今、渡せ！』と叫びましたが、阿螺田は、

『私が外に出るまでは駄目ですよ。』といつてなかなか渡しませんでした。

魔法使は大變に腹を立てゝしまひました。そして例の奇妙な粉を燃えてゐる火の上に振りかけて、前のやうに、御經の文句を唱へますと、忽ち、輪の着いた石が、後へすべり込んで、開いた地面がもとのやうに蓋をしてしまひました。阿螺田は土の下の暗闇に殘されたのです。

さて、この魔法使は何のために、阿螺田を使つてランプを取り出さうとしましたかといふと、この魔法使は、自分の國のアフリカで、魔術の力で、支那に不思議な力を持つてゐるランプがあるといふ事を知りましたが、そのランプを我が物とするには、自分で取つて來ないで、他人に賴んで、取つて來させねばならぬのでした。さういふ理由で、魔法使は阿螺田の伯父に化け込んで、阿螺田にランプを取りに遣らせたのでした。そして、ランプを自分の物にすると一緒に、阿螺田を殺してしまふ心算でした。

が、この計畫が見事、物にならなかつたのを見た魔法使は、アフリカに逃げて歸つて、久しい間、姿を見せませんでした。

さて、地面の中に閉ぢ込められた阿螺田は、外へ出ることが出來なかつたのです！　阿螺田は、先きに行つた大廣間から、かの美くしい果樹園へ出ようとしましたが、行くてには、もう壁が立ち塞がつてゐて、どこへも行く事が出來ませんでした。

四五日の間は、阿螺田は泣いたり、唸つたりして、坐つてゐましたが、とても逃げ出す途がありませんから、此所で死ぬものと覺悟を決めまして、拜むやうに自分の手と手を握りました。すると先きに魔法使が阿螺田の指にはめた指輪が擦れました。

と、忽ち、大きな身體の人間が、幽靈のやうに現はれて、阿螺田の前に立つたのです。

『御主人樣、何か御用で御座いますか、私は貴郎の篏めてゐる指輪の奴隸ですから、その指輪をはめてゐる方の御命令には何でも從はねばならぬので御座います。』とこの大きな男が申しました。

『お前さんは誰だか知らないが、兎に角、私をこの恐ろしい所から外に出して下さい。』

かう、阿螺田がいひますと、まだその言葉が終るか終らないうちに、地面が開らけたと思ふと、もう阿螺田の身體は、自分の家の戸口に來て居りました。

が、久しい間、何も食べなかつたのと、もう一度お母さんの家へ歸つて來られた嬉れしさとで、阿螺田は氣を失つて、其場に倒れてしまひました。

併し、阿螺田は直ぐに正氣に歸つて、

『理由は後で話しますが、どうか早く何でもよいから食物を下さい。お腹が減いて死にさうです。』と申しますと、お母さんは、

『あッ！　家にはもう食物が何もないのだよ。ただ少し許り綿が殘つてゐるが、それでも賣つて來ませう。』と悲しさうにいつて、立ち上がらうとしますと、

『お母さん、一寸お待ちなさい。綿なんか賣るよりも、私が持つて來た、この古いランプを賣つた方がよいではありませんか。』

かういつて阿螺田は、ランプを母に渡しました。

ランプを受け取つた阿螺田のお母さんは、なるべく、よい値段で賣りたいと考へまして、古くなつて錆びかゝつてゐるランプを擦らうとしました。

が、ランプを一すり擦りますと、床の上から、大きな、黑い人の形が音もなく現はれて來て、それがぐる〳〵と煙のやうな輪を畫いて天上に屆きました。

『何か御用ですか。私はそのランプの奴隸ですからそのランプを持つてゐるお方の御用なら、何なりといたします。』

かうそのお化がいつて、ゆら〳〵と動きました。

阿螺田のお母さんは、吃驚して氣絕しました。阿

螺田は、お母さんの手からランプを取り上げましたが、併しその手はガタ〳〵と顫えてゐました。

『何か食物か持つて來てくれ！』

阿螺田は、自分の上から覗き込んでゐるお化を見て顫え聲でかういひました。

すると、ランプの奴隷は、煙となつて消え失せましたが、直ぐまた、もとの姿を現はしました。今度は、お化は金の茶碗と金の皿の上に旨しい御馳走を盛つて來たのです。

この時、阿螺田の母は正氣になつて起きあがりましたが、恐ろしくて御馳走を食べることが出來ませんでした。そして、惡靈のついてゐるその氣味の惡いランプを早く賣つてしまふように、阿螺田に說きすゝめました。

併し、不思議な指輪と奇妙なランプが、自分にとつて價値のある物だと分つた阿螺田は、恐しがつてゐるお母さんを慰ぐさめて、ランプを大切にしまつて置きました。

お金が入用になつた時に、阿螺田は、ランプの奴隷に持つて來た金の皿と茶碗を賣りました。そしてお金がなくなつた時には、ランプを擦つて、お化を呼んで、金の皿や、茶碗に盛つた御馳走を持つて來させました。

かうして、阿螺田とお母さんは、幾年も、樂しい暮しをいたしました。

さて、阿螺田は、王樣のお姫樣が大變に美くしい方だと聞いてゐましたので、どうかして一度、そのお姫樣を見たいとの願ひが、阿螺田の心に湧き上がつて、どうすることも出來ませんでした。

阿螺田はどうして、お姫樣を見やうかといろ〳〵考へて見ましたが、どの計畫も、駄目なやうに見えました。といふのは、お姫樣は外へ御出かけになる時はきつと、ベールで深くお顏をお隱くしになるから

でした。

が、たうとう阿螺田は、王様の御殿の中に這入り込んで、戸の中に身を隠くし、戸の隙間からお姫様の御通りになるのをチラと見ました。

お姫様の美くしさといつたら、まるで、體から光が出るやうでしたので、阿螺田は暫時氣が脱けたやうに、茫として立つてゐました。

家に歸ると阿螺田は、

『お母さん、私はお姫さまを見て來ましたが、私はあのお姫様をお嫁にしようと決めました。でお母さんは、これから直ぐ王様の所へ行つて、その通り御願ひしてください。』と申しました。

これを聞いたお母さんは、自分の息子が氣が違つたのではないかと思ひました。併し、阿螺田は大真面目で、お母さんを攻め立てゝ是非、王様の所へ行つてくれと、うるさく、强請みました。

そこでお母さんも仕方がありませんから、次の日

いや〳〵ながら、王様に献上する爲めに、かの不思議な寶玉の果物を風呂敷に包んで、王様の御殿へ出かけました。

併し、王様の御殿にはもう、御願ひのある澤山の人民達が押しかけてゐましたから、阿螺田のお母さんは怯びえてしまつて、ずつと後の方に立つて居つて、王様の前へ進み出ることが出來ませんでした。そして其日一日中、風呂敷包みを持つたまゝ、立つてゐました。

かういふ風に、お母さんは王様の御殿へ一週間も通ひました。そして一週間目に、やつと王様にお目にかゝることが出來ました。

『あの風呂敷包みを持つて、毎日後の方に立つてゐる女は、一體何者だ。』と王様は申されました。

そこで總理大臣は、阿螺田のお母さんに、王様の前に進み出るやうに吩咐けました。お母さんは怯づ怯づしながら王様の前に出て、頭が地面に着く程、

低く御辭儀をしました。

王様の前に出たお母さんは、恥かしくて、ものが云へませんでしたが、王様が優しく、お言葉をかけられるので、やつと勇氣を出して、自分の息子の阿螺田がお姫さまをお嫁にしたい、といふことを申しました。そして風呂敷包みを開いて、寶玉の果物を出して、

『これは息子からの献げ物で御座います。』と申しました。

王様の周圍に立つてゐた人々は、いろ〳〵の色に輝く寶玉を見て、皆な目が眩みさうになつて、思はず「あッ！」と叫びました。阿螺田のお母さんが持つて來たやうな寶玉の果物を、今まで誰れも見たことがなかつたからです。

王様も大變驚ろかれまして、側にゐる總理大臣に、

『かういふ寶物を献げる若者に姫を與れてもよいと思ふが、お前の考へはどうぢや。』と申しました。

併し、總理大臣は、お姫さまを自分の息子のお嫁にしたいと思つてゐましたから、さう急いで結婚の約束をしないで、後三ケ月お待ちになる方がよいと忠告を申し上げました。王様もこれは尤なお話だとお思ひになつて、阿螺田のお母さんに、三ケ月の後に話を極めるから、三ケ月目にまた來るようにといつてお母さんを歸らせました。

阿螺田は家へ歸つて來たお母さんの話を聞いて、大變に喜び、三ケ月のたつのを待つてゐました。

併し、それから二ケ月たつた或夕方のこと、阿螺田は王様の御殿から都中に響き渡るやうな、喜んで騒いでゐるらしい聲を聞きました。阿螺田は戸外に出て行つて、その理由を人に聞いて見ますと、王様のお姫さまが今夜、總理大臣の息子と結婚するのだといふことが分りました。

これを知つた阿螺田は、王様が約束を違へたのに大癇癪を立てゝ、例の不思議なランプを取つて擦す

りました。すると先きのお化が現はれて、
『何か御用ですか。』と問ひました。
『王樣の御殿へ行つて、お姫さまと總理大臣の息子を連れて來てくれ。』と阿螺田がいひました。
すると、お化はたちまち、お姫さまと總理大臣の息子を運んで來て、阿螺田の目の前に置きました。
『では、息子の方を外へ出して、朝まで、番をしてゐてくれ。』と阿螺田はお化に吩咐けました。
お姫樣は驚いて居りましたが、阿螺田は自分こそ眞實の花婿だから、恐れるに及ばないといひました。
朝になつてから、阿螺田の命令通りに、お化が現はれて來て、總理大臣の息子と花嫁のお姫さまとを一緒に、もとの通り御殿へ送り返しました。
『お早う！』といつてお姫さまの室に這入つてお出になつた王樣は、お姫さまは俯むいて泣いてゐるし花婿は、ぶる〳〵顫えて居るのを見て吃驚しました。
『どうしたのかね？』と王樣がお訊ねになつても、お姫さまは唯だ泣く許りでした。
その夜も同じ事が起りました。
阿螺田は、お化に吩咐けて、昨夜のやうにお姫さまと息子を運んで來させまして、息子の方を寒い戸の外へ追ひ出したのです。そして朝になると、矢張り昨日のやうに二人を御殿へ送り返したのです。
その朝も、王樣がお姫さまの所へ參りましたが、お姫さまは泣いてゐる許りでなく、何をきいても返事をしないので、王樣は怒つてしまひました。
『泣くのはお止し、直ぐ理由をお話し。でないと、お前の首を切つてしまひます。』
さう王樣が申しましたので、お姫さまは、殘らず理由を話しました。總理大臣の息子も、もうこの上寒い夜に戸の外に立たせられるやうな慘めな目に逢ひたくないから、お姫さまに別れたいと申しました。
そこでお姫さまと總理大臣の息子の婚禮は中止になりました。（つゞく）

商人と魔の話

霜田史光

一

大財有福な商人がありまして、地所だの、品物だの、お金だのを澤山持つてゐました。この商人は商ひのことで始終旅をしてゐなければならなかつたのです、或日のこと、遠くへ行くので、馬に乗つて、ビスケットと棗とを詰め込んだ嚢をぶら下げて出かけました。これは食物のない沙漠を通る時の用意です。

商人は無事に先方に着いて用事をたし、歸り途につきました。すると、四目目になつて莫迦に熱いのでどこか樹の下で休む所はないかと探しながら歩いてゐますと、程なく綺麗な泉のそばに大きな栗の木があるのを見つけました。商人は馬から降りて、馬をその木に繋ぎ、自分は泉の邊に腰を下して、嚢の中からビスケットと棗とを取り出しました。そして棗を食べながら惡戯半分にその種を左右に投げ散らしました。やがてこのつましい食事を濟ましてから、泉の流で顔や手を洗ひました。

ひよつと顔を上げて見ると吃驚したことには、目の前に大きな魔が眞赤になつて怒つて劍をさげて自分の方へ寄つて來るのです。

『立て！　貴樣はよくも己れの倅を殺したな。さアその返報に己れも貴樣を殺してやる。』と恐ろしく大きな聲で叫びました。その聲の凄いつたら、その顔の身の毛もよだつほど恐ろしいつたら、商人は今迄こんなものは見たことも、聞いたこともなかつたので、ぶる〳〵と慄へながら、

『ど、どういたしまして、何んで私が貴方にそんな惡いことを致しませう。』と云ひました。

『いや、己れは貴樣を殺さなきア承知が出來ないのだ。貴樣は己れの倅を殺したからだ。』と魔はまた云ひました。

『飛んでもないことです。私が貴方の息子さんを殺したなんて、それは何かの間違ひでせう。第一私は息子さんを知つてゐません。まだお目に掛つたことさへないのでございます。』

『ちア云つて聞かせるが、貴樣は此處へ來て地の上へ座らなかつたか。嚢から棗を出さなかつたか。棗を食ひながら左右に種を投げなかつたか。』

『はい、その事なら慥かに仰言る通りにいたしました。』

『だから貴樣が己れの倅を殺したと云ふのだ。貴樣が種を投げてゐる時己れの倅が通つたのだ。そして一つの種が眼に當つて倅は死んだのだ。さ、覺悟をしろ、己れが貴樣を殺してやる。』

『もし、貴方樣、どうぞお赦し下さいまし、お慈悲でございます。』と商人は吃驚しながらふるへる聲で申しました。

『ならん！』と魔は一層大きく呶鳴りました。

『でもそんなことで息子さんを殺さうなんて夢にも思はなかつたのでございますから、どうぞ命だけはお助け下さいまし。お願ひでございます。』

『くどい！　貴樣が己れの倅を殺したから己れも貴樣を殺すだけだ。』

と云つて魔は商人の腕をつかまへて地面に叩きつけ、劍を振り上げて一打ちに首を斬り落さうといたします。この所商人は一生懸命になつて、お助け下さいを繰り返し、家に殘して來た妻子のことまで云つて憐みを乞ひましたけれども、魔は赦して呉れさうな樣子が見えません。

今や魔は一打ちに商人の首を斬らうとしてゐますので、商人は周章てゝ叫びました。

『ではもう一言云はして下さい。どうぞ私に暫らくの間命を預けて下さいませんか。家へ歸つて妻子に別れを告げて、遺言狀を作るだけの時間で宜しうございます。それさへすめばすぐに此所へ戻つて來て、貴方のお手に掛つて殺されませう。』

『おい〳〵、貴樣はその通りにしてやつたら、己れを瞞して、戻つて來ない心算なんだらう。』

『どういたしまして、私は立派に神樣にでも誓ひます。きつと間違ひなく戻つて參ります。』

『一體幾日位だ。』

『たつぷり一年お許し下さい。十二ヶ月たつた明日、私は屹度戻つて來てこの木の下で貴方を持つて居ります。その時こそ思ふ存分に息子さんの敵をお討ち下さい。』

これを聞いて魔は商人の云ふ通りに許して呉れました。そして忽ちその恐ろしい姿は消えてしまひました。

商人は暫らくは氣を失つたやうにぼんやりしてゐましたが、やつと心も落ち付いてきましたので、又馬に乘つて歸り途につきました。

さうして商人が無事に家に歸り着くと、妻子の者は大喜びで出迎へました。けれども商人は喜ぶ所か悲しさうに泣き出しましたので、妻子の者は、これは何か深い事情があるのだらうと、どうぞ話して下さいと皆して賴みました。

『己れはな、あと一年しか生きて居られないのだよ。』と云つて商人は嘆息をし、沙漠の中の泉の邊で遭つた災難の事から、魔と約束したことまで殘らず物語りました。

妻君はそれを聞いて狂ひさうになつて嘆き悲しみました。子供達の哀れな泣聲は家中に響きました。

商人は翌る日から仕事の始末に取り掛りました。借りたものは返し、また知り合ひの人達には理由を話して自分の品物を遺品として贈つたり、貧乏人には澤山のお金をやつたり、今まで使つてゐた奴隷を自由な身にしてやつたり、そしてまた妻君や子供達にはこの先不自由な思ひをしないほど澤山なお金を分けてやつたりしました。

やがて一年間の日はぢきに來てしまひました。商人はいよ〳〵來當の「お別れ」をしなければならなくなりました。また仕度をして馬に乘り「さやうなら」と云ふ言葉も涙で曇つてしまひましたが、それでも妻子やお友達の悲しむのを振り切つて出立いたしました。

商人が魔と約束した泉の側の栗の木の下に着いたのは、恰度約束した日から丸一年經つた日でした。商人は馬から降りると泉の邊に座つて、魔が自分を殺しに來るのを、今か〳〵とびく〳〵しながら持つ

てゐました。

商人がかうして待つてゐるとき、牝鹿を一匹連れたお爺さんが向ふからやつて來ました。商人がちよいとお叩頭をすると、お爺さんも挨拶してから、

『お爺さんはどうしてこんな恐ろしい所へ來なすつたんだね。お前さんはこの邊に性の惡い魔が澤山ゐるのを御存知ないと見えるな。この邊の美しい木を見てゐると、人間でも住んでゐさうだが、どうしてどうして、險呑至極な所だ。一寸だつて足を止める所ぢやない。』とお爺さんは心配さうに云ひました。

商人は仕方なく此處へ來た理由を隱さず話しますと、お爺さんは呆氣にとられて聞いてゐましたが、

『それはまア飛んだ災難と云ふものだな。だが私はお前さんが魔にお逢ひなさる所を見屆けたい。』

お爺さんはかう云つて商人の傍に座りました。商人は大層喜んでお爺さんと話してゐると、其處へまた一人、二匹の黑犬を連れたお爺さんがやつて來ました。そして一寸挨拶してから、此處に座つてゐる理由を訊ねました。

牝鹿を連れてゐたお爺さんは、商人と魔との話しをすつかりしました。すると次に來たお爺さんも、どんな事が起るか見て行かうと云つて、前のお爺さんの傍に座りました。そして二人と話してゐると、また三人目のお爺さんがやつて來ました。そして商人を見て何故あの人はあんなに悲しい顏をしてゐるのですかと訊ねましたので、二人のお爺さんは商人と魔との話しをすつかりしてやりました。するとこのお爺さんも亦、前の二人のお爺さんと同じやうなことを云つて一緒に座つてしまひました。

問もなく遙か遠くの方に、濃い煙のやうな、ま風に吹き上げられた砂埃のやうな一塊のものが見え始め、見る〳〵、その塊はだん〳〵と近づいて來て、急に消えたと思ふと、眼の前に例の恐ろしい魔がひよつこり現はれました。そして魔は物をも云はずに

商人の側へ寄つて來て、劍を片手に、ムンヅと腕を掴みました。

『起て、今日こそ貴樣が己れの伴を殺した返報に貴樣を殺して呉れるわ。』と叫びました。

その時牝鹿を連れて來たお爺さんは、魔の足下にひれ伏して、

『おゝ、魔王樣、どうぞ暫らくお待ち下さいまし。そしてお怒りをお靜めになつて私の申し上げます事をお聞き下さいまし。私は自分の身の上話と、この牝鹿のお話しとをお聞かせいたしたうございます。そして、若し魔王樣が殺さうとしていらつしやるその商人の話よりも、私の方がずつと不思議だとお思ひになりましたら、どうぞこの男の罪を三分の一だけ減らしてやつて下さいまし。』

魔はそれを聞いて暫らく考へてゐましたが、

『宜しい。それではお前の話しを聞くとしよう。』と云ひました。

二、（お爺さんと鹿の話）

『これから私の話しを始めますから、どうぞ篤りとお聞き下さい。』

と云つて、お爺さんは話しはじめました。

實の所、いま御覽になつてゐられるこの鹿は私の妻なんでございます。これが私の所へ嫁いで參りましたのは十二の歳で、それから三十年も一緒にゐま

したが、一人も子供が出來ませんでした。私はそれでは如何にも心細くて仕樣がありませんから、三十年目に女の奴隷を一人買つて來て、望み通りに男の子を一人產ませたのです。何しろ三十年も欲しがつてゐたのがやつと叶つたのですから、私は眼の中へも入れたい位可愛がつたのでございます。それでその母親の女奴隷をも粗末にしないやうになつたのも、矢張り人情と云ふものでせうか。所が妻はこの事を大層妬きまして、私の子が十の時私が旅に出た留守の間に、妻は惡計をする爲めに魔法を習つたのです。すつかり習ひ覺えてから子供を遠くに連れて行つて術を以つて犢の姿に變へてしまひました。そして自分が買つて來た犢だからよく番をして呉れと云つて番頭へ渡しました。そして、又女奴隷をも牝牛に變へてしまつて、矢張り番頭に預けてしまひました。

私は歸つて來てから子供の事とその母の女奴隷のことを尋ねますと、妻は、

『あの奴隷は死にましたよ。子供の方は家出をしてからもう二月にもなりますが、いまだに歸つて來ません。さア何處にゐますことやら、私には分りません。』

と、答へました。

女奴隷が死んだと聞いては私も悲しくなりましたが、子供の方は居なくなつたゞけだから、いつか歸つて來ることもあらうと思つてゐました。所が八月もたつたのに子供は歸つて來ないばかりか音沙汰もありません。そのうちにバイラム祭（回々教のお祭り）が來ました。

そこで私はお祭の犧牲として神樣にお供へする爲めに、番頭に云ひ付けて、よく肥えた牝牛を連れて來させました。番頭が連れて來たその牝牛と云ふのは、實は可哀さうな女奴隷でしたが、そんなことは私が夢にも知らう道理がありません。それで、牝牛

を縛つて殺さうといたしますと、此上もなく悲しい聲で鳴き出しました。見るとその眼からは涙が流れて居ります。私はこの樣子を見て大層不思議に思つたし、その上に可哀さうになりましたので、番頭に向つて、これは連れて歸つて他の牝牛を持つて來るやうに吩咐けました。すると私の傍に見てゐた妻は、私の氣の弱いのを喞ふのです。と云ふのは、妻の惡計が今一息と云ふ所でおぢやんになつてしまふからです。

『あなた！　どうしたんですよ。どうしてこの牝牛が殺せないんですよ。犧牲にするにはこれより良い牛は家にはありアしないのですのに。』

妻の機嫌の惡いのを直さうと思つて、私は又殺さうとしましたが、獸の鳴聲と涙との爲めにすつかり氣が挫けてしまつて、殺すことが出來ませんでした。

『お前あつちへ連れて行つて殺して呉れ、己れにはとても殺せない。』と云つて私は番頭に吩咐けてしまひました。

番頭がその牝牛を殺して皮を剝いだ所、あれ程肥つてゐたものが、骨ばかりで何一つなかつたので、あまりの不思議さに私はぼんやりしてしまひました。

『駄目だ、こいつは片付けて置いてくれ。そして若し肥つた犢がゐるなら代りに連れて來て呉れ。』と私は仕方がないので番頭に云ひました。

すると番頭は如何にも肥た犢を牽いて來ました。私はこれが私の子供だつたことを知らなかつたのです。犢は一生懸命になつて綱を切つて私の許へ驅けて來ました。そして軀を私の足に擦り寄せ、頭を地べたへくつつけて、

『どうぞ命をとることだけは勘忍して下さい。』と云はぬばかりの樣子を見せました。

牝牛に涙を流されて氣の挫けた私は、この犢の有樣に一層驚いてしまひました。どうしてこれを私に殺せさせう。

『この犢はあつちへ連れて行くんだ。よく勞つてやつてくれ。そして直ぐこの代りになるのを持つて來るがよい。』と私は番頭に云ひました。

この言葉のまだ終らぬうちに妻は、

『あなた、何を云つていらつしやるのですよ。この外の犢なら一つも犧牲にしないで下さい。』と口を尖がらして云ひました。

『うんにや、どうあつてもこの犢は殺せない。』と私はがん張りました。妻はいろ〳〵と文句を並べましたが、私は承知しませんでした。その代りに來年のお祭りの日には必ずこの犢を殺して犧牲にするからと、私は妻に約束してやつとこの場を納めました。そして別の犢を殺させましたので、前のは無事に牽かれて行きました。

その翌る日、番頭は内密でお話ししたいことがあるからと云ふので、私は番頭を別室へ招んで見ますと、

『私はお知らせに參つたのでございますが、お喜び下さいまし。實は私の娘に一人魔術を心得てゐるのがありまして、昨日旦那樣が犧牲にする事をお止めになつたあの犢を牽いて歸る途中で娘に逢ひました所、娘は犢を見ると嬉しさうに笑つてから、今度は急に悲しさうに泣き出したのです。訳しなことだと思ひましたので、その理由を娘に訊ねますと、どうでせう。娘の答へたことは次のやうなのですよ。

『お父さま、その犢は御主人の息子さんですわ。まだ無事でゐらしつたので思はず嬉しくなつて笑ひましたけれど、殺されたこの息子さんのお母さまのことを思つて又泣いてしまつたのですわ。お二人ともあんな姿にしたのは奥樣の仕業なのですよ。奥樣は母子の者を大層憎んでゐらしつたのですもの。』

――『おゝ魔王樣』とお爺さんは云つて、またお話しを續けました。――

これを聞いた私の驚きはどんなだつたでせう。どうぞお察し下さいまし。私はちかにその娘から話しを聞きたいと思つて、番頭と連れ立つて行きました。そしてまつ先に子供のゐる小舍へ行つて見ると、子供は口こそ利けませんが、私が撫でたり抱いたりしてやると其悦ぶことつたらありません。正しく私の伜でなくてどうしませう。番頭の娘が來ましたから、私は子供をもとの姿に復すことが出來るでせうかと少し慌て氣味で尋ねて見ました。

『出來ますとも。だが二つの條件を肯いて下さらな

ければ。』と番頭の娘は答へました。

『一つは息子さんを私の夫にして下さると云ふ事、それからこんな姿にした女に罰を與へてやりたいと思ひますから、それを御承知願ひたいことですわ。』

私はすぐにかう云ひました。

『始めの條件は心から贊成です。支度金もたんと上げませう。それから次の條件は贊成はします けれど、どうか命だけは助けてやつて下さいませんか。』

『えゝ、命だけはお助けしませう。然し、奥樣が息子さんとそのお母さまになさつた通りに、私も奥樣にして上げますわ。』

と云つて娘は妙な器に水を入れたのを持つて來て私どもには解らない呪文を唱へ乍らその水を犢にかけますと、忽ち、犢は元通り若い息子になりました。

『おゝ、倅！ 可愛い倅！』と叫んで、私は餘りの嬉しさにやたらに接吻して、

『この親切な娘さんが、お前を苦しい魔法の中から助けて呉れたのだよ。そのお禮にお前はこの娘さんを嫁に貰つて呉れるだらうね。』と云ひますと、倅は喜んで承知いたしました。

そして番頭の娘は私の倅と婚禮をする前に、私の妻を牝鹿に變へてしまひました。いま此處にゐるのがそれですが、私はその時番頭の娘に、牝鹿でもいいからその上の妙な形のものにして下さるなと頼みました。と云ふのはどうせ變へられるにしても、嫌な思ひをしないで家族の中へ置きたかつたからなのです。

倅夫婦は暫らくの間は樂しく暮してゐましたが、やがて妻に死なれて倅は鰥になり、落膽したものかふいと家を出てしまひました。私は今實は倅を探しにゆく途中なのですが、妻はこんな姿に變つてゐますし、殘しても置けないので一緒に連れて來たやうなわけでございます。隨分不思議な話ではありませんか。』

魔物は聞き終つてから、

『成程、不思議な話ぢや。よし、それでは商人の罪を三分の一だけお前に免じて宥してやることにしよう。』

と、云ひました。

一番目のお爺さんが話しを終つた時、二匹の黑犬を連れてゐた二番目のお爺さんが魔に向つて云ひました。

『私も一つ身の上話しをいたしませう。それは今の話よりももつと不思議なのですが、お聽きになつてお氣に入りましたら、どうぞこの商人の罪を三分の一だけ私の爲めにも宥して下さいませんか。』

『宜しい。だがお前の話が牝鹿の話よりもよくなきゃ駄目だぞ。』

と、魔は云ひました。

其處で、二番目のお爺さんは次のやうなお話しをしたのです。

三、（お爺さんと二匹の黑犬の話）

二番目のお爺さんは話し出しました。――大魔王樣、この二匹の黑犬と私とは實は三人兄弟であります。私どもの父は三人へ各々千セキン（五千圓）づつのお金を殘して亡くなりましたから、そのお金で三人とも商人になりました。商ひを始めてから暫らくして一番上の兄は――この二匹の中の一匹ですが

――外國へ貿易に行かうといふので、種んな財産を皆賣拂つて、しこたま品物を買ひ込み、それを船に積んで勇んで出かけましたが、丸一年と云ふもの少しも便りがありません。するとその一年の終り頃、一人の見すぼらしい旅の乞食が私の店へ參りました。

『ごきげんよう。』と私が聲をかけて見ますとその乞食も、

『お前さん、ごきげんよう。』と云つて、『お前さんはこの私が分らない筈はあるまいね。』と云ふので、よく見ますと、それは一番上の兄でしたから、すぐに家に入れて商ひのことを訊ねますと、

『その事は訊かないでお呉れ。私の姿を見れば大抵想像がつきさうなものだ。一年の間にとても澤山の災難に遭つて、たうとうこんな姿になつてしまつた。それを話した所で私の胸の苦しみが新たに強くなるばかりだから。』と云つて詳しい事は話しません。

私は店を閉めてから兄をお風呂に入れたり、一番綺麗な着物を出して着せたりして、種々と手厚くもてなしました。そして私の財産はその時始めの倍になつてゐましたのでその半分を兄にやりました。

『兄さん、これであなたその損したことを忘れてしまつたらいゝでせう。』と云ふと兄は大層喜んでその金を受取りました。そして私達は前のやうに一緒に暮してゐました。すると暫らくしてから今度は二番目の兄も店や外の財産を賣つて旅に出かけると云ひ出しましたので、上の兄と私とは一生懸命になつてそれを止めましたけれども、どうしても肯き入れません。たうとう隊商の仲間になつて出かけましたが、これも亦一年たつと上の兄と同じやうな姿に落ぶれて歸つて來ました。

其處で私は上の兄へしたやうに親切にして上げてまた蓄めて置いた千セキン（五千圓）の金をその兄にやりました。兄はそれで又店を開きました。

或日のこと、兄達が私の所へ來て、三人で貿易に

出かけようではないかと相談を持らかけました。

『兄さん達は今迄旅に出られましたが何か儲かりましたかね。』と云つて私は逆ねぢを食はせる位のつもりで始のうちはしきりに斷りましたけれど、それでも兄達はその後幾度となく、私の家へ來ては勸めました。私は五年の間、嫌だと通しましたが、たうとう兄達に負かされて行くことになつてしまひました。で、いよ〳〵その仕度をして入用な商ひの品物を買入れようとしますと、兄達は私がやつた千セキンのお金を殘らず失くしてゐることが分りました。それでも私は今更愚痴も云はずに、私の蓄めた六千セキンの中千セキンづゝを兄達にやつて、私も千セキンを使ふことにして、あとの三千セキンの殘りはそつと家の傍に埋めて置きました。

私達は品物を仕入れて船に積み、風のよい日に出帆しました。

二月ばかり航海してから、とある港に着きましたので、そこへ上陸して都合よく貿易をいたしました。そして向ふの國の品物を買ひ込んでから、本國へ向けて出帆しようとしてゐた時、私は海岸で一人の女に逢ひました。女は服裝こそよくないが綺麗は上々でした。女は私のそばへ來て手に接吻して、

『どうぞ私をあなたの奥さんにして船へ乘せて行つて下さい。』と賴むのです。私はあまりの唐突だつたし、また手足まとひにもなると思ひましたので、すぐ樣斷りましたけれども、女は、屹度よいお妻さんになつて、あなたの手助けをしますからと本氣になつて誓ひましたから、私もたうとう承知してしまひました。

其處で女の汚い着物を脱がせて美しい着物を着替へさせ、婚禮の式を濟ませてから一緒に船に乘つて出帆しました。長い航海中、妻は種々な事に優れてゐたり良い性質を見せたりしましたので、私はだんだん好きになつて來ました。

所が、三人のうちで私ばかりがこんな幸せになつたものですから、二人の兄は妬み出して私を殺さうと相談を始めたらしいのです。或夜のこと、私達が何も知らずに眠つてゐる所を、ふいに私と妻とを海の半へ投げ込んでしまひました。所が妻は不思議な術を知つてゐて、水の中へざんぶと落ち込む前に私を掠ふやうにして或島へ連れて行きました。

夜がほの〳〵と白む頃、妻は、

『私がたゞの人間でなくて、魔女だと云ふ事はもうお解りになつたでせうねえ。實の所あなたが歸りの船に乘らうとしていらしつた時に、怜度私が海岸に居合せたものですから、あんな姿になつて故意とあなたのお心を試して見たのですよ。所があなたは心からよいお心の方だと云ふことが解りましたから、私もあなたをお救ひしたのですわ。これで私も御恩返しが出來たと云ふものですが、それにしてもあの二人のお兄さんには腹が立つてなりません。私はどうしてもあのお二人の命をとる心算ですわ。さうしないと私のお腹の虫が納まらないのですもの。』と云ふのです。

私はこの話に胸をびくつかせながら聽き入つてゐました。そしてこの女のして呉れたことは有難く思ひましたけれども、兄達の命を取ることだけは赦してやつて呉れと丁寧に頼みました。そして私が今迄種々と兄達に盡して上げたことを話して、こんなに自分は兄達を思つてゐるのだから、ひどいことをしないで下さいと頼みました。けれども、魔女はそれを聞いて一層腹を立てて、

『それ程までにあなたがして上げたのにあんなことをするなんて、益々憎らしくなります。私はどうあつても命を取らなければ承知が出來ません。これから行つてあの船を沈めてそんな人でなしを魚の餌食にしてやりませう。』と云ひます。

『あゝ、そんなひどいことは止めて下さい。あれは私の血を分けた兄さん達です。私は一緒に故國へ歸りたいのですから。』と云つて私は尚もしきりに頼みましたけれども、その言葉の終るか終らない中に、私の身がふわりと空中に浮いたと思ふと、瞬く間に私は自分の家の屋根の上に置かれてゐました。見ると魔女の姿はもう見えません。

私は早速屋根から下りて家の中へ入り、中から戸を開けて出て、出かけるときに埋めて置いた三千セキンのお金を堀り出しました。そして店へ行つて、種々な人にも挨拶いたしました。

店から本宅の方へ戻つて來ますと、見慣れない二匹の黑犬が馴々しく私の足下に寄つて來ました。その樣子が余り不思議なので私は驚いてゐますと、其處へ魔女がまた現はれて、

『あなた、この犬を御覽になつて驚くことはありません。これは二匹ともあなたの兄さんですよ。私は十年の間この姿をして居れと申し渡したのですわ。』

と魔女は云つて、それから十年の後に逢はうと云ふ場所を私に知らせて置いて、その儘消えてしまひました。

その十年目の日はもう間もなく來るのです。私共は魔女に逢はうとしてかうして旅をしてゐるのでございます。そして丁刻こゝを通りかゝつて、この方達に遭つたのでございます。

大魔王様、私の身の上話と云ふのはざつとこんなものでございます。何と不思議なことではありませんか。

魔王すつかり感心してしまつたと見えて、

『如何にも不思議な話だ。よし、では前に免じてこの商人の罪の三分の一を滅らしてやらう。』と云ひました。

二番目のお爺さんが話し終つた時、三番目のお爺さんに前の二人と同じやうなことを魔物に頼みました。其處で魔物はその話が前の二人よりも優つてゐたら、商人の罪の殘りの三分の一を宥してやると約束しました。

三番目のお爺さんは話し出しました。そのお話は前の話しよりもつと面白く、もつと不思議でありましたから、魔はいたうとう我を折り、

『仕方がない、罪の殘りの分をお前に免じて赦してやるぞ。』と云つて商人に向ひ、

『お前はよく〳〵命冥加な奴だな、この三人がゐなかつたら、すんでのことこの世におさらばをしてゐた筈だのに。』

かう云つて魔はふつと姿を消してしまひました。

三人はやつとのことほつと安心しました。

商人はお禮の言葉も出ないほど嬉しがりました。

やがて四人は各々別れ〳〵になつて見ふ道に歩き出しました。

商人はやがて妻子のゐる家に歸つて、その後を幸せに暮したと云ふことです。（をはり）

魔法の馬

水谷まさる

（一）

では元日が、一年を通じてのいちばんの祭日でしたが、そのある元日のこと、波斯王は何時間も何時間も、人民たちが用意したいろ〳〵の不思議な見世物を、喜んで見てゐました。けれど、もうそろそろ夕方近くなつて來ましたので、宮廷へ歸らうとしかけますと、ちやうどその時、一人の印度人が、波斯王に見せるために、一頭の馬を引き連れてやつてまゐりました。ところが、その馬といふのが、ほんとの生きた馬ではなくて、まるで生きてゐるのかと思はれるほど、上手に造つてある馬なのでした。

『陛下！』と、その印度人は地面に身を屈めて叫びました。『わたくしは陛下が、この不思議な馬をごらん下さることをお願ひしたいのでございます。陛下が今日ごらんになつたいろ〳〵の見世物のうちには、この馬のやうな不思議なものはなかつたと思ひます。わたくしがこの馬の脊中に乘つて、どこへでも行きたいと望めば、この馬は二三分の間に、わたくしをそこへ運んで行つて呉れるのでございます。』

もと〳〵波斯王は、不思議なものが何より好きでしたから、大そう面白く思つてこの馬を見ました。『まるで、あたりまへの馬としか思へない』と、波斯王は云ひました。『だが、この馬のはたらきを見たいものぢや。』

そこで、波斯王は遠くの山を指さして、その山の裾に生へてゐる棕櫚の樹から、一枝取つて來るやうに、印度人に命じました。

印度人はすぐさま鞍へ飛び乘つて、馬の頸についてゐる小さいぼつぢをまはしました。すると、たちまち馬は空中に飛びあがつて、すん〳〵山の方へ飛んで行つて、また〻く間に見えなくなつてしまひました。そして、十五分とは經たぬうちに、彼はふたたび

現れて、波斯王の足もとに棕櫚の枝を置きました。

『でかしたぞ。』と、波斯王は大聲で云ひました。『お前の魔法の馬は、朕がこれまで見たものゝうちで、一番不思議なものぢや。ところで、この馬の値段はいくらぢや！　朕はこの馬を手に入れたい。』

印度人は頭を横に振りました。

『陛下。この馬はお錢と代へることは出來ません。もつとも、この馬と同じ價値のあるものとならば、代へてもよろしうございます。そこで、わたしはかう申しあげませう。もしも陛下が王女樣を、わたくしの妻にして下さいますなら、わたくしはこの馬をさしあげませう。』

この言葉を聞いた王子は、すつくと立ちあがつて父の波斯王に向つて云ひました。

『父上、あのやうな願ひをかなへてやらうなぞと、決して夢にもお思ひなさいますな。』

すると、波斯王は答へました。

『王子よ、朕はどうあつても、この不思議な馬が手に入れたい。けれど、王女と取り換へることを承知する前に、朕はお前にこの馬のはたらきを試して貰ひたい。そして、この馬について、お前はどう思ふか、聞かして貰ひたい。』

波斯王と王子との話を、聞きながら立つてゐた印度人は、王子が魔法の馬のはたらきを試すことになつたことを喜びました。そして、王子のために、どういふふうにすればいゝか、その方法を敎へはじめました。けれど、王子は鞍に乘つて、馬を進ませるためのぼつぢを見つけると、彼はゆる〳〵話を聞いてゐられなくなりました。そこで、彼はそのぼつぢをまはして、空中を飛んで行つてしまひました。

『あゝ！』と、印度人は叫びました。『王子樣はどうしたらこゝへ歸つて來られるか、それを知らずに行つておしまひになつた。王子樣がもう一つのぼつぢを、もしもお見つけにならなかつたら、あの馬を止

印度人は再び現れて波斯王の足もとに格子の欄の枝を置きました。

めることもお出來になるまい。』

波斯王はこれを聞いて、大そう驚いてしまひました。それに、もうこの時には、王子の影は見えなくなつてゐました。

『惡者奴』と、波斯王は叫びました。『お前は牢屋にぶち込まれるのぢや。そして、もし王子がゝゝがなくこゝへ戻つて來ることが出來なかつたら、お前は殺されてしまふのぢや、いゝか。』

（二）

王子は樂しく空中を飛んで、たうとう雲のところまで來ました。もはや下の方はなんにも見えませんでした。これは大そう愉快でした。こんな氣持のいいことは、生れてから初めてゞでした。けれど、間もなく王子は、もう降りて行かなくてはならないと思ひました。そこで、彼はそのぽつちを、ぐる〳〵まはしたり、前後に動かしてみたりしましたが、ちつとも變りがないやうで、相變らず下へ降りるどころか、上へ上へとあがつて行くので、しまひには青空へ、ごつんと頭かぶつかるのではないかしらと思ひました。

けれど、いつたいどうなることでせう？　王子はいくらか焦り氣味になつて來ました。でも、もしかしたらほかのぽつちが、あるのかも知れないと思つて、彼は馬の頸を手探りで探つてゞました。嬉しいことには、ちやうど其のすぐ右に、小さなぽつちを探りあてることが出來ました。そこで、そのぽつちをまはしてみますと、靜かにゆる〳〵と、魔法の馬が輪をかきはじめたことに氣がつきました。やがて星の輝いてゐる夜の空中を、下の方へずん〳〵降りて、夜の紫色の外套を通して、白い灯影の輝いてゐる美しい町が、眼の前にずつと展げた時には、彼は嬉しまぎれに大聲をあげました。

何ものかもが、彼にとつては不思議に思はれました。どつちの方角へ馬を行かせたらいゝのか、まる

でわかりませんでしたから、彼は馬の行くまゝに委せておきました。すると、間もなく大理石で作つた大きな宮殿の、屋根の上に降りて止まりました。その屋根のまはりには、廻廊があつて、廻廊の端には、扉口がありました。そして、その扉口からは、白い大理石の階段づたひに下の方へ行かれるやうになつてゐました。

王子はすぐにその階段から降りて行きました。すると、大きな部屋へ來ました。その部屋には色の黒い奴隷たちが、一列になつてぐつすり眠つてゐて、次の部屋へ行く入口を護つてゐました。

王子はよく〳〵氣をつけて、靜かに這つてこの番人たちの列を通り拔けました。そして、入口にさがつてゐる垂幕をあげて、次の部屋のなかを覗き込みました。

それは、數限りもない灯のともつてゐる立派な部屋で、たくさんの奴隷たちが、ぎつしり部屋いつぱいに眠つてゐました。そして、部屋のまんなかの安樂椅子の上には、とても美しい王女が眠つてゐました。彼はその王女の姿に、たゞもうぢつと見とれてしまひました。

彼は王女があんまり可愛らしいので、さうやつて見とれながらも、息がつまるやうな氣がしました。やがて、彼は足音を立てないやうにして、王女のとこでま行きました。そして、安樂椅子のそばに膝まづいて、彼女の手にそつと觸りました。王女は溜息を洩らして、ぱつちりと眼を開けました。そして、彼女が聲を出さない前に、彼は默つてゐてほしいといふこと、怖がらないでほしいといふことを小聲で

囁みました。

『わたしは王子なのです。』と、彼は云ひました。『波斯王の息子です。ところが、今わたしは生命が危ないのです。それで、あなたに護つていたゞきたいのです。』

さて、この王女といふのは、ほかでもありません、ベルガン王の娘なのでした。そして、たま〳〵町はづれにある夏宮殿に、たつた一人で泊つてゐたのでした。

『お護りいたしませう。』と、王女は手をさし出して親切に云ひました。それから、彼女は奴隷たちを起して、この見知らぬ人に食物をあげるやうに、また寢室の用意をしてあげるやうに命じました。

『わたくしはあなたの冒險について、お聞きしたいと思ひます。そかれらまた、どうしてこゝへいらしたか、お聞きしたいと思ひます。』と、彼女は王子に向つて云ひました。『けれど、ともかくも、まづお休

みになつて、元氣を取り返して下さいませ。』

王女はこれまでに、この見知らぬ若い王子のやうな、勇ましくて美しい人を、見たことがありませんでした。彼女はいつたん別な部屋へ行つて、いちばん好きな上衣に着換へたうへに、いちばん價値のある寶石でもつて、頭髮を飾りました。それは、この王子の眼に、出來るだけ自分の姿を、美しく映したかつたからでした。それだもので、王子は彼女をふたゝび見た時、彼女のことを世界中でいちばん可愛らしい王女だと思ひました。そして、心から彼女を愛しました。けれど、王子が自分の冒險について話した時、彼女は溜息をついて、間もなく彼がこゝを去つて、父親の宮廷に歸るにちがひないと思ひました。

（三）

王子は云ひました。

『悲しがつて下さいますな。わたしはこそ〳〵と歸らずに王子としてふさはしい態度で歸りますし、おまけに、あなたの父上から結婚の許しを受けて歸りますから。』

でも、王女は答へました。

『たつた二三日でいゝのですから、どうぞこゝにゐて下さいませ。そんなにすぐに、あなたとお別れすることは、わたくしには出來ませんもの。』

王子はちよいとの間なら喜んでこゝにゐたいと思ひました。そこで、王女はいろ〳〵ともてなしましたので、ずん〳〵日が經つて、王子もぐづ〳〵とここにゐてしまひました。

けれど、たうとう家のことや父親の悲しみを思ひ出しましたので、王子はすぐに歸ることに決めました。

『わたしの王女よ。』と、彼は云ひました。『別れはやつぱり辛いものです。いつそあなたはわたしといつしよに、魔法の馬にお乘りになりませんか？　わた

王子と王女は魔法の馬に乘つて海や陸の上を高く飛んで行きました。

したなら、結婚することになりませう。それから、わたしたちはあなたの父上のところへ歸ることにしませう。』

そこで、二人は魔法の馬に乘つて、王子は腕で王女の身體を抱へるやうにして、それから魔法のぽつぽちをはしました。陸や海の上を、高く高く飛んで行きました。やがて、王子はもう一つのぽつぽちをまはして、王子の父親が住んでゐる町はづれに降りました。彼は門の外の宮殿へ馬を乘りつけて、王女をそこへ待かしておきました。それといふのは、彼は自分一人で行つて、結婚のことを父親に同意して貰はうと思つたからでした。

さて、王子が宮廷へ行つた時、彼はみんなが褐色の服を着てゐるのを見出しました。おまけに、町の鐘といふ鐘は、悲しさうに鳴つてゐました。

『なぜみんなをんなに悲しいのか？』と、彼は一人の兵に尋ねました。

『王子樣だ！　王子樣だ！』と、その男は叫びました。『王子樣がお歸りになつたぞ！』

間もなくこの喜ばしい知らせが、町中に傳はりました。すると、どの鐘も悲しさうに鳴るのをやめて、喜ばしい響をたてました。

『愛する息子よ！』と、波斯王は彼を抱きしめて叫びました。『われ／＼はお前がもはや歸つて來ないものと思つてゐた。それで、三日三晩、お前のために悲しんでゐたのぢや。』

それ以上、話をかうともしないで、王子は自分の冒險について話しました。それから、ベンガルの王女が、門の外の宮殿で、なぜ待つてゐるのか、そのわけも話しました。

『なるほど、それではすぐにその方を連れて來るがいゝ。今日のうちに結婚式をあげるのぢや。』と、王は喜んで云ひました。

それから、王は例の印度人を牢屋から出して、魔法の馬といつしよに、出發してもいゝといふ命令を與へました。なぶん首をはねられることだらうと思つてゐたのに、自分の身になつて魔法の馬といつしよに、出發してもいゝと云はれた時の、印度人の驚きはそれこそたいしたものでした。彼は王子がどんな冒險をしたのか、尋ねてみました。そして、門の外の宮殿で、王女が待つてゐるといふことを聞いた時、彼の頭には惡い計略が浮びました。

彼は魔法の馬に乘つて、王の使者が宮殿につかないうちに、先まはりをして宮殿へまゐりました。

『王子樣がわたくしに、王女樣を魔法の馬に乘せて、父上の宮殿へ連れて來るやうにおつしやつたことを、王女樣にお告げして下さいませ。』と、彼は奴隷に向つて云ひました。

王女はこのことを聞いて、大そう喜びました。そして、この印度人といつしよに行くために、魔法の馬に乘りました。

けれど、あゝ！　印度人がぽつぽちをまはして、馬が空中を飛びはじめると、彼女は自分がこの波斯の國と、愛する王子とから引き離されて、遠く運ばれて行くのだといふことを知りました。彼女はお祈りをしたり、いろ／＼と印度人に向つて賴みましたけれど、それはまるで無駄でした。印度人はただ彼女を嘲けるばかりでした。そして、自分が彼女と結婚しようと思つてゐるのだと云ひました。

（四）

王子と王子の家來たちが、門の外の宮殿へ來てみますと、印度人が先に來て、王女を運んでしまつたのを知りました。王子は悲しみのために、心がつぶれさうになりました。けれど、彼は自分の花嫁を見つけることが出來ると思つて、まだ望みをかけてゐました。彼は托鉢僧に姿を變へて、彼女を探しに出かけました。そして、彼女をせひとも探すか、もし、探せなければ死んでしまふのだと、自分に向つて誓

ひました。しかし、もうこの時までに、魔法の馬は幾百里も飛んでゐました。印度人はお腹が空いて來たので、カシミヤの町に近い森のなかへ降りました。こゝで、印度人は食物を探しに行きました。そして、果物を探して歸つて來て、疲れて氣の遠くなつてゐる王女にも、その果物を分けてやりました。王女がその果物を少しばかり食べると、急に彼女は大そう元氣が出て氣がしつかりして來ました。そして、たくさんの馬の足音が耳に入つたので、彼女は大聲をあげて、助けを求めました。

馬に乘つた人たちが、すぐに彼女を助けに來ました。そこで、彼女はすばやく自分の身の上を話しました。それを聞いた隊長は、部下の者たちに、印度人の首をはねるやうに命じました。その隊長といふのは、カシミヤの王でありました。彼は王女を自分の馬に乘せて、自分の宮殿へ連れて行きました。

王女はこれでやつと苦勞がなくなつたと思ひましたが、それはとんでもない間違ひでありました。王は彼女を一目見ると、どうあつても結婚したいと思ひました。それで、一刻も早く結婚の準備をするやうに命じました。

王女は波斯に歸していたゞきたいと願ひましたが、それは無駄でした。王はたゞ薄笑ひを洩らすばかりで、結婚の日取を決めてしまひました。かうなつては、どうしても彼の心を變へさせることが出來ないと見て取りましたので、彼女は自分の身を救ふために、一つの計略をたてました。それで、彼女は何でもかまはずに、思ひついた馬鹿々々しいことを、喋舌り散らかしました。それからまた、まるで氣狂ひのやうに振舞ひました。ところが、それが大そう上手にやれましたので、たうとう結婚式は延びて、あらゆる醫者といふ醫者が、彼女を癒すことが出來るかどうか、診察するために呼び込まれました。

けれど、醫者が傍へやつて來ると、いつでも彼女

がひどく亂暴をしますので、醫者は彼女の脈をとることも出來ませんでした。それだもので、どの醫者も一人として、彼女がわざと氣狂ひらしくしてゐるのだといふことを、見つける者はありませんでした。

王は大そう困りました。方々へ人をやつて、偉い醫者を呼ばせました。けれど、誰も彼女を癒すことは、出來さうにもありませんでした。

一方、波斯の王子は、王女を探すために、あちこちと流れ歩いてゐました。そして、彼が印度の大きなある町に來た時、みんながこの國の王と結婚する筈の、ベンガル王女の悲しい病氣について、話し合つてゐるのを耳にしました。そこで、彼はすぐに醫者の姿に身を變へて宮殿へ行き、王女の病氣を癒しに來たと云ひました。王は喜んでこの初めて遭つた醫者を迎へました。そして、王女がたつた一人で坐つてゐる部屋に、すぐに連れて行きました。彼女は泣きながら、兩手を振りまはしてゐました。

（五）

『陛下よ。』と、姿を變へてゐるこの王子が云ひました。『わたくしといつしよに、どなたもこの部屋にお入りなさらぬやうに願ひたうございます。さうでないと、お癒し申すことが出來ないでございませう。』

そこで、王は彼の傍から去つて行きました。王子は王女の傍へ近づいて行つて、靜かに彼女の手を取りました。

『愛する王女よ。』と、彼は云ひました。『わたしを御存知かい？』

懷かしい聲を聞いた彼女は、あんまり嬉しかつたのでものも云へませんでした。

『わたしたちは逃げ出すことを考へなくてはならない。それで、魔法の馬はどうなつたらうね？』と、王子が云ひました。

『私は存じません。でも、こゝの王が魔法の馬の價値を知つてゐますから、きつとどこか安全な場所

つましでん包を姿の女王どん殆が煙の料香
たし時王子はすかすは馬に飛び乗りました。

へ入れてあると思ひます。』と王女が答へました。『では、王に向つてあなたが殆んど癒つたといふことを、納得させなくてはならない。』と、王子が云ひました。

王は前よりもずつと王女がよくなつたのを見て、すつかり嬉しがつてゐました。それだもので、明日はすつかり癒してしまへると、云つた時には、王の喜びは非常なものでした。

『わたくしは王女様が、魔法の馬の魔法のために、いくらか害なはれていらつしやるのを知りました。』と、彼は云ひました。『もしあなた様が魔法の馬を四つ辻に引き出して、その脊中に王女様をお乗せ下さいましたら、わたくしは呪ひを解く魔法の香料を用意いたしませう。その光景を見させるために、人民たちをお集め下さいませ。また、王女様には立派な服を着けて、寶石ですつかり飾つておあげ下さいませ。』

そこで、次の朝になると、魔法の馬は人々の集つてゐる四つ辻に引き出されました。王女はその脊中に乗つてゐました。やがて、姿を變へてゐるこの王子は、馬のまはりに炭を燃やした四つの火鉢を置きました。それから、その火鉢のなかへ、いい香のする香料を投げ込みました。香料の煙がもやもやと立ちこめて、殆んど王女い姿を包んでしまつた時、すかさず王子は、王女の乗つてゐる鞍の後に飛び乗つて、ぽつぽちをまはして、青空さして飛んで行きました。けれど、王の頭上を飛ぶ時、彼は大聲で、

『カシミヤの王よ、この次、お前が王女と結婚する時には、まづ第一にお前と喜んで結婚するのかどうか尋ねるがよい。』と云ひました。

かうして、波斯の王子は、ベンガルの王女をふたたび連れて歸りました。魔法の馬は二人が安全に波斯に歸りつくまで、一息に飛んでしまひました。そして、波斯へついてから、二人は喜びのなかで結婚をいたしました。（をはり）

大震災の日

（原稿到着順に掲載）

大地震大災の日、金の星の諸先生はどうなすつたか、特にお願ひして其日の御消息を集め皆様にお知せします。（記者）

顔中シヤボンだらけ

小島政二郎

ちやうど地震の時に、私は裸で髭を剃るつもりで、顔中をシヤボンだらけにしてゐました。今將に研ぎたての西洋剃刀を一當て當てようとした時に、ドシン〳〵と下から持ち上げられました。お辭りしておかなければなりませんが、私は大の地震嫌ひでどんな小さな地震にでも、誰よりも先に顔の色をかへて靠椅の下に隱れてしまふのですが、この時ばかりはさうは行きませんでした。私よりも先に、私の奥さんと、その姉と、女中とが靠椅の下に逃げかくれて、もう滿員です。見ると、三人とも顔へ扶を當てたまゝ、突つ伏してゐます。かうなると、いくら地震嫌ひだと云つても、私は男です。强くならなければならんぞと大決心をしました。

それと一しよに、地震の方でも强くなつて、ドシン〳〵と下から搖り上げたのが、今度はグラ〳〵と家をこれまはし始めました。すると、頭の上の電燈が、大きく左右に搖れてもう少しで天井にぶつかりさうに搖れました。そのうちに、靠椅の上の花瓶や額縁が落ちて來る、庭の石燈籠が倒れる、バシヤツとすさまじい勢で瓦が落ちて割れる、叢所の方や玄關の方でガラ〳〵ヒシヤンと絶え間なく物の落ちて割れる音がする。もう止むかもう止むかと思つてゐても、地震はなか〳〵止みさうにもしません。

『この强情な家め。これでも潰れぬか。これでもか。』と云ふやうにしつつこくグラ〳〵家をこねまはし續けました。女三人はあまりのことに、とう〳〵ワア〳〵泣き出しました。

私はと云ふと、顔中をシヤボンだらけにした裸のまゝで、鼠が蛾んでシヤンと立つてゐられずに、下手な遊動圓本に乘つたやうな恰好をして、座敷の眞中に立ち蛾んだまゝ、クハバラ〳〵と搖られてゐました。しかし、口だけは達者で

『泣くんぢやない。大丈夫〳〵。この家は潰れるもんか。』と威勢をつけてゐましたが、その實、内心は潰れるものと覺悟をしてゐました。

帝國ホテルの一室

水島爾保布

間もなく、第一の搖れがやんだ時、お濠の方に聲をかけられて、初めてホツと生き返つた心地がして、急いで前の廣場へ逃げ出しました。そこの櫻の大木にしがみつきながらも、女三人はまだオイ〳〵泣いてゐました。滑稽ぢやありませんか。ところが、女の方に云はせると、シヤボンだらけの顔を眞青にして

『もう泣くんぢやない。もう泣くんぢやない。』と、さも强さうに叱つてゐた私の方が餘程滑稽だつたと云ふ話です。成程、云はれてみれば、そりやア私の方が餘程滑稽だつたか知れません。

ある會に出席して帝國ホテルの一室に居りました。これから食卓につかうといふところへあの地震でした。

『こいつア中々大きい、出ちやア危い。出ちやア危い。』と、一人が制止しました。

『テーブルの下がいゝ。』と、いつて急いでもぐり込んだ人がありました。

『眞中がいゝ。眞中へ立つてれば安全ださうだ。』と、或る一人の人は僕の肩をつかまへて叫んでゐました。

氣がつくと、四隅からザラザラとまるで水を流すやうに壁土がこぼれ落ちて來ました。天井にはめ込んだガラスを疑して、眞青な空があつちへ行つたりこつちへ行つたりして壯んに搖れてゐました。煉瓦で築き上げた柱が中途から歪んで、今にもおつぺし折れさうに動いてゐました。とかくするうちに地震は一先搖り止みました。テーブルの白い布の上は盛り上つたやうに砂がこぼれて居ました。そして不思議なことには、一番先にひつくり返つて、ころがり落ちて了ひさうな大小のコップ類には些の異狀もなく、そして最も異狀もない筈のフオークが二本、それから魚用のナイフが一丁床の上に飛んで居りました。

搖り止んだ間をねらつて大急ぎで外へ飛び出しました。飛び出したには飛び出したんですが、御承知の通り迷宮のやうな建築です。大まごつきにまごついた事は申す迄もありません。

『どうもこんな時は餘り藝術的にやられると困るよ。』と、慌てた中でも僕は戀と餘裕を見せて叫んだものです。

西洋人が奥さんだか妹さんだかを抱へたり支へたりして階段を下りて來るのを二組ほど見ました。寶石で飾り立てたオペラパツクだの、綺麗な日傘だの、立派な女帽子だのが、サロンの卓上に、床の上に、おつぽり出されてあるのも見ました。まるで活動寫眞そつくりの光景でした。

死んだと思つた

蕗谷虹兒

怖しいことがあればあるものです。

白いエプロンを首のまはりに

西條八十

まるで大潮氣の時の海を見るやうに、近所の瓦屋根が、大浪を立ててゴーッと、打寄せて來るよ思ふや否や、私のお家は、その浪に戯弄される小舟かなんぞのやうに、グラグラグラと搖ぎ出しました。

本棚は屏倒し、椅子はひっくりかへる、棚の置物や壺類は飛礫のやうに砕けぶりの中へけし飛んでしまふ。——私もお客さんも、弟達も四ッんばい。四ッんばいでデスクの下へ潜りこむ。もう駄目だ——、ナ、ナ、ナンマンダアッ——覺悟は定めたが、潰れて死んだら、どんなにどんなに痛いだらうと私はしっかり目をつぶりました。そして、なるべく痛くないやうにと神様にお祈りしながら、眠死するのを今か今かと待ちました。

ところが、家の潰れぬうちに地震は鎮まり、私達は、壓死者にならぬ前に、倒れた家具か飛び越え、飛び越え、精子段を玄關へ玄關か外へ、逃げ出したのです。

『あゝ助かつた』『あゝ死んだと思つた』『命びろひをしました』『いやはや壽命が縮まりました』等と家族一同が避難地の公園の林で抱み見合せた時、皆んなの顏色は死人のやうに眞蒼で物凄い程でありました。

あの日の朝は八時ごろ起きました。朝餐を濟ませてから二階の書齋で、昨夜遲くまで掛つてやつと書いた二拾枚ばかりの原稿にふり假名をつけました。これは藤澤編彦さんの手許に屆ける約束のものでした。それを封じてから、速達にして出さうと自身で大久保百人町郵便局へ出かけました。風はあつたが、よく晴れた氣もちのゝゝ朝でした。

歸りみち、『松本』といふ理髮屋をのぞくと、知りあひの高田といふ職人が挨拶しました。そこでふいと頭を刈る氣になつて立寄りました。さうして世間話をしながら、半分ほど刈つて貰つたところへ、あの地震です。

『先生あぶない！』と、高田君はいつの間にか私を抱へるやうにして、戸外へ伴れ出してくれました。見るとあたりの家の屋根が波のやうに搖れてゐる。若い職人たちは、眞蒼になつてまへの氷屋の緣臺の下にもぐり込んでゐる。

と、この時、私の胸に閃いたのは、家族たちのことでした。妻が入院中なので、うちには盲目の老母と、六つと四つの女兒ざり。それに女中が二人ゐるのであるが、その大きい方はことによると使ひに出てゐるかも知れない。さう思ふ途端に、私はそのまま家の方へ駈け出しました。『先生あぶない！』とうしろから高田君が叫ぶのも聞かずに。——

さうして五六間駈け出したところへ第二の——あの一番大きかつた震がやつて來て、私は足をとられて往來へ倒され暫、ちてくる瓦でイヤと云ふほど背中をぶたれました。それにもひるまず起上つて、やつと家へ駈け戻るなり、玄關から壓みかけたが、何の返事もありません。そこで胸をとゞろかせながら覗び込んで見ると、裏庭の井戸端のトタン屋根の柱に、大きい女中が、お女子、小さい方が長女を負つて老母もともどもとり縋つてゐました。大きい女中は私の顏を見るなり、聲を立てて泣だしました。

それから急いで一同を連れて、前の聖書學院の草原に避難させました。そこへちやうど高田君が私を心配してあとから飛んで來たので今度は直ぐに自轉車で、妻の病院へ樣子を見に行つて貰ふやうに頼みました。

ところでこの騒ぎの中になかしかつたのは、私が頭を刈る時あの白いエプロンを首のまはりに結んだなり家まで飛んで來た

少年自警團員（蕗谷虹兒畫）

ことでした。萬一あれなり途中で死んだら、どこぞのコッケ位に間違へられたかも知れません。もつともよつぽど猛烈に駈けたゝ見え、新しい日和下駄が眞半分にわれてゐました。

一時間後高田君が妻の無事なことを知らせてきました。

入京の困難

野口雨情

震災當日の前日、八月三十一日午後八時三十分、佐渡の教育會と婦人會から童謡と音樂の講演に招かれて、作曲家中山晋平氏・聲樂家の佐藤千夜子さんと共に上野驛をたちました。越後路へはひつて夜が明けてからは、折驟雨が來ましたが大したこともありませんでした。新潟へついたのは九月一日（震災當日）の午前十時頃でした。私達は新潟佐渡連絡汽船の船宿で袈裟を待つてゐました。船宿の女中さんは『船に酔ふお方は梅干なお腹の上へあてて一錢銅貨で押へておきなさい酔ひませんよ』とオマヂナイを教へてくれました。丁度十二時近くと思ひます。可成り長い地震が二回かゆりました。あとで思ふと東京に地震のあつたのはこの時です。私達はそれとも知らずに、間もなく汽船に乘つて新潟の港を出ました。この日は二百十日のためか非常に日本海が暴れて汽船は幾回となく激浪に浸されました。船客の群もが隨分の難儀をしながら佐渡の兩津港へついたのは午後七時半頃でしたらう。

東京震災の噂を聞いたのは、二日の午後でしたが、東京新潟間の電信電話がとまつて了つて詳細な知ることが出來ませんでした。三日になつて越佐新報の中川香果氏（その當時私達と共に佐渡にゐまりしたが）が、新潟毎日新聞や新潟の通信社からやゝ詳報を聞いてくれましたが、何しろ諸説がまち〳〵で、不安の中に新穂教育會主催の講演と演奏だけをすまして翌四日の朝佐渡をたちました。

新潟市は平常とべつだん變りはありませんでしたが、長岡邊からこちらは、ひどく人心が殺氣だつて世の中が變つたのかと思はれました。途中各驛の雜踏と物々しさは全く無警察も同樣でした。私達は長野驛前龜屋旅館支店の好意で各自三日間の食糧品を携へ、有蓋貨物車に乘つてやつと大宮驛まで來ましたが、その日大宮にまで戒嚴令が布かれて、官公用命を帶びた證明書のない私達は、汽車便によつて入京の不可能のことを知つて、自由行動をとることにしました。千夜子さんとは大宮でわかれ、中山氏とは板橋でわかれ、田舎の金の屋社へ私のついたのは震災八日目の九月八日でした。

お釜の踊

藤澤衛彦

あの恐ろしい慘酷な大地震の來ることを、皆さん、誰が一番最初に豫知したでせう。

それは關東の山野に棲まふあの雄です。雄は山野にゐる動物のうちで、一番はやく地震の初期微動を感知する動物の一つです。なさけない事に人間は、そんな感じる本能などは、とうの昔に失してしまつてゐたので、ドシン、ガラガラと來るまで何にも知らずにゐたのです。

この點については、人間ほど犬よりも劣つてゐますね。あの日犬の鳴聲は異樣であつた筈ですよ。それは、何となく、かれらが、地震の來ることを豫じめ知つてゐたからでせう。

人間のつくつた地震計なんて、ほんたうに不完全なものぢやありませんか。

さて、その日、やつぱり此世の變災については、未來に何があるかといふことをちつとも知らなかつた私は、お盆から外出のつもりで、いつもになく早くお雜煮御飯を食べてゐたのです。然し、今から思ふと、どこともなく其日の氣分が、いらいらしてゐたのは確かです。

子供達は、私より前に濟んで、まだ食卓のまはりになりました。

私がやつと一杯濟みかゝつたその刹那です。地震學の先生たちがいふ地震主要部の前じらせがやつて來たのです。

ドシンと一つ、上に持ちあげられた時、私は昔の人たちが言ひ傳へた話を思ひ出して、

「下からもちあげた地震だぞ、すぐ大きいのが來るぞ。」と聲をあげたのですが、私自身にしても、まさか、あんな大地震がやつて來やうとは知りませんでした。

然し、私たちは、主要部の大ゆれがやつて來る前に、家が潰れても安全と思はれる、箪笥と箪笥の間に避難してをりました。するとたんにあの大ゆれがやつて來たのです。

天地もひつくがへて一ひしやぎ、ボンベイ最後の日が來るかと思はれる程の大ゆれに、末の蒼生子は聲をあげて、

『恐いよ、恐いよ。』と、私にしがみつきました。彼はまだ八歳でした。私は彼をかゝへて、

『父さん母さんと一緒です。何も恐いことはありません。』と、きつとだきしめました。

上の文子も力一杯私にしがみついて、これはただ默つてをりました。

妻の從子は、箪笥が倒れはせぬかと氣づかつて、兩手に二つの箪笥を力を盡して支へてをります。

その折私たちは、死んでもこれはお互ひに愛しあつて死ぬのだと思つてをりました。

私たちのゐたのは、折から茶の間であつたので、箪笥の間の避難所からは、臺所に續いて起る滑稽な光景が顔りに眼にうつりました。

醬油のビンが倒れて、紅い水が、流に向つてドクドクと流れだす傍に、カルピスのビンがこれも日をあけて、ドクドクと流れてをります。

それよりも、後で滑稽だつたと話しあつたのはお釜の踊りで

した。

私たちの家の廊下、鐵の瓶で、お釜のかけかたがどうなつてゐた拍子か知らないけれど、地震と共に瓶の上で、私たちのお釜は忽ち躍てこな踊をはじめたのです。

「お釜の踊なんて、こんな地震でもなければ見られませんれ。」と銀つた後に言つた妻でさへ、その踊の最中には、たゞお釜をみつめてゐただけで、ぼやぼやしてゐたのでした。

お釜の踊りは、愛の家を飛出したのだらうと私は思ひました。

幸ひ無事に踊つて一家がほつとしました時、またもやつて來る揺りかへし、いつまでも何だか身體が揺れてるやうで、その晩はとても安心が出來ず、それに夜の十一時若くは午前の一時から三時までの間に再び大揺れが來るといふ流言に迷はされてその夜は表通りの大學正門前の電車線路であかしました。

何を言いても、その日一家揃つてゐたことは、どんなにお互ひに幸福であつたかといふことを感謝してをります。

庭でむすびを

馬場孤蝶

わたしの住まつてゐる家は大凡五間四方位の廣さで、裏手にそれより少し狹い位の廣さの庭があり、その庭には大凡幅三四尺、長さ二間程の池があり、池の向ふの隣りの亞鈴葺きの小屋との間には板塀のこちら側に白楊、楓、高野槇、松、八つ手と

いふやうな樹が木立をなしてゐるのです。

家が大分古くつて、傾いてゐるので、少し強い地震の時は、何だか不安心なので、大抵何時も庭へ出るのでしたが、彼の日も、あんなにまで恐い地震にならうとは思ひませんでしたけれども、何時もの癖で、揺りだすと間もなく、何の氣なしに庭へ出てしまひました。すると、やがて、地面が大波のやうに揺すぶれだし、地面の上の有らゆる物が揺り動かされる何とも云ひやうのない凄い音に取りまかれてしまひました。あたりが一體に薄暗くなつたやうな心持がしました。立つてゐることはできさうもないので、片手を松の樹にかけてからだを支へました。振り返ると、長男の二十一になるのが、わたしの後から飛び出して來てゐて、これはつかまるものがないので、庭石の上へ躍んで、地べたへ手を突いて、家のなかへむけて、『早く出ろ、早く外へ出ろ』と大聲で叫んでゐます。雨水で赤く濁つた池水が今にも溢れさうに波うつのも凄い感じを增すものゝ一つでした。そのうちに、瓦落々々といふ烈しい音がして、屋根の瓦が殆どみんなかと思ふほど崩れ落ちて、庭の方のは庭石にぶつかつて、まるでこなゝと云つていゝ位に碎けてしまひました。

家内と娘とが庭へ飛び出して來ました。家内の方は丁度飯を炊いてゐたので、瓦斯のネヂを止め、娘の方は箪笥の倒れさうになるのを押へてゐたり何かして、出て來るのが後れたといふのでした。

家内は長男に近くにかたづいてゐる長火の方の襟子を見にと

犬を愛する人（水鳥彌保布畫）

駆けつけさせ、自分は箪笥の間を見て、衣の具合をしらべにと家へ入つて行きましたが、瓦斯七輪の上へかけたまゝにして來た釜が踊し元へはね飛されて、あたりが飯粒だらけになつてゐたので、これから又飯を炊かなければならぬと云つて、土瓶に七輪に土鍋、茶碗、皿、鉢、鐵鍋といふやうな食器類、道具や米、野菜、香の物といふやうな食用品を順々に持ち出して來て炊事の支度にかゝりました。

池を木立との間の少しの築山のやうになつてゐるところへ、蓙を敷いたり、籐椅子を持ちだして來たりして、そこで何うにか午前だけをすましてしまひました。二時過ぎになつて、長女の方は全く無難だつたといふので、バナヽを見舞ひに持つて長

男と一緒にやつて來ました。本郷の店へ行つてゐた婦もやつて來ました。二人は少したつてから歸りました。

夕方近くなつて、番羽に居る友だちのことを見舞ひ、居間のなかも少しかたづけなどしてゐるうちに、夜になつたので、小田原提燈の薄暗い火をたよりに、一同庭でむすびをたべました。

地震はもうたいしたことはないやうだし、火事も餘程遠いやに見えたので、十時頃からみんな家のなかへ戻つて寢ました。

大地震の日

中島孤島

丁度賽飯をすまして、二階の書齋へかへつた時でした。テーブルに向つて、椅子へ腰をおろしながら、書きかけの原稿をつゞけようと思つてペンをとりあげると、足の下で、ドンと一つ最初の微動を感じました。

わたくしは生れつき地震が大きらひで、平生から地震については人並よりも感覺の鋭敏な方ですが、この時も、わたくしの神經は、すぐに地震を感じたのでした。そしてその感じが、いつもの時とはちがつて、横にゆれずに、下から突きあげる風の感じでしたから、わたくしの頭には、咄嗟に『これは強いぞ！』といつたやうなものが浮びました。同時に、わたくしは椅子を立つて、無意識に階子をおりました。

階下では、子供たちがまだ食卓のまはりで遊んでゐましたがわたくしが玄關まで出た時に、グラ〳〵と最初の大ゆれが來たので、みんながアッといつて、わたくしのまはりへ集まつて來ました。

下駄をはく猶もなく、わたくしは子供らを抱へておもてへとび出しました。その時、雲は未の子をつれて便所へはひつてゐましたが、これも子供をかゝへて一足おくれて、駈け出して來ました。

その時には、戸外へ出たのは、まだわたくしの一家ばかりでしたが、間もなく、遠波の音をきくやうなゴーッといふ響と一しよに、地面が波のやうにもりあがつて、まはりの家根から、土煙を立てて、グラ〳〵と瓦が落ちはじめた頃には、近所の人々も、みんなよろ〳〵しながら家をとび出して來ました。

わたくしたちはしばらく子どもをかゝへたまゝ、地面に座つてゐました。その間も、地面は波のやうに搖れて、あちらこちらで、物の落ちる音が聞えるので、どうなることかと思ひながら、じつとしてゐると、やつと搖れがとまりましたが、それでもゆれかへしが怖ろしいので家へはひる氣にもなれずに、また折々やつて來る地震に、生きた心もなく、同じ場所に座つたり立つたりしてゐました。

その間もゴーッといふ響につれて、幾度か大ゆれが繰返しました。暫くすると、早稲田と目白の兩方面に當つて、黑煙がもや〳〵と立ちのぼるのが見えて來ました。その時分には、往來はもう人が一ぱいになりましたが、通る人の話で、早稲田大學と學習院から火が出たのだと分りました。

それでも幸に火事はならず、兩方面とも間もなく靜まりますし、餘震ももうたいしたこともなくなつたので、家へはひつてもいゝとは思ひましたが、子供たちがひどくおびえてゐるのと、まだゆれ返しがあるといふ風說がもつぱらでしたからその晩は、とにかく、近くにゐる友人の庭へ避難することにきめました。

夕方には、もう下町の大火報道が顏々として傳はつて來ました。そして古鄰なちぎつたやうな煙が、段々に折重なつて、モヤモヤと天の方へ立ちのぼつて行くのをながめてゐると、以前信濃の高原で見た淺間の噴火の光景を思ひ出さずにはゐられませんでした。

その晩、下町から來た人の話で、九段の上から見おろすと、神田から丸の内へかけて、見渡す限り一面の火の海を現してゐると聞いた、そのすさまじい光景を、頭のうちに描きながら、わたくしはとう〳〵一睡もせずに、怖しい一夜を明かしました。

親の命日に

窪田空穗

今度の地震について、無事か何かと御見舞をして下さつた方方に御返事かたがたその日の樣子を認めます。やうやく御返事をする程の落ちつきを得ましたから。

私どもの住んでゐるところは、小石川區の目白臺の、女子大學に隣りしたところです。家族は、夫婦に、中學生一人、小學生の女生一人、學校へあがらない男の子一人、それに手傳ひをしてゐる娘一人の六人で、なりふし臺灣から來て泊つてゐる私の友だちが一人ゐました。

九月の一日は、私に取つては記念すべき日となつてゐます。私の父親の命日なのです。私は年々、心ばかりのものを靈前にそなへて、餘りの家族だけで食べることにしてゐます。その日も靈に赤飯を食べようとして、その支度の出來るのを待つてゐました。

この命日を一しよに過さうといつて、東京にゐる甥が、菊の花を持つて來てゐました。

甥と臺灣の客とは、二階の間で、碁を打ち出しました。食事を待つあひだを、面白く過さうとするのです。內輪の客のあるのを喜んで、男の子は二階へ上つて來てゐました。中學生の子も來て碁を打つのを見てゐました。この子は、今日から學校が始まつて、今日だけは早退けですが、明日からは當り前の授業をうけるのです。それで今日は、前から樂しみにしてゐた淺草公園の方へ散歩に出ようとして、若し今日がお祖父さんの命日でなかつたなら、午前から出懸けようとしてゐたのです。今も靈飯がすんだら出ようと思つてゐました。

朝のあひだ吹いてゐたやゝ强い風はいつか止んで、雲もない

空は夏らしくまぶしく輝いてゐました。南に向つた私の二階は、やゝ暑く團扇を欲しいくらゐになりました。

その〻安な時です、だしぬけに家が大震動を起して來たのは。

『地獄だ』と感じました。それにしても何〻になくひどいと思ひました。さう思つた時には私はもう、そこにゐた男の子を膝の上にだきかかへてゐました。

私は搖れるに任せて搖られながら、そこから見える外を見渡しながら、膝の上の子に、

『大丈夫だ。大丈夫だ。』

と靜かに云つてゐました。それは小さい子を驚かせまいと思ふ心から云つたところもありますが、本當に大丈夫だとも思つたのです。家の倒れつぶれる地震、そんな大地震があらうとは思はれなかつたのです。

搖り止むのを待つてゐる心は、反對に不安にされて來ました。水平動だと思つた地震は、上下動をまじへて來、それとこれと一しよになり亂れあつて來たのを感じたからです。それからこれへ移るのは、僅かの時間でした。外へ放つてゐた私の眼は、まだ見たことのない光景を見せられました。それは、私の二階からやゝ遠い、空へ浮んだやうになつてゐる二階屋の瓦屋根が俄にその瓦を落し出したのです。屋根瓦は殆んど全部ざふつと、板の上から砂、落、やつに落ッました。落ちると一しよに屋根の上から、土埃が黄ろく空へ立ちのぼりました。それもあれも、見える程の

パパも仲間に入れてくれ（寺内萬治郎畫）

屋根は、みんな一時にさうなりました。

『ひよつとすると家がつぶれるかも知れない。』

その時になつて私は初めてさう思ひました。それと共に濃尾の大地震に逢つた人の經驗談を聞せたのを思ひ出しました。地震で逃げ出す時には、鴨居が外づれてから出て、結構間に合ふ、其前に出るのはかへつてあぶない、瓦に頭を打たれるからだ、といふのです。

鴨居が外づれるか知らないと思つて私は部屋のなかを見まはしました。襖はゆらゆらと搖れて、鴨居から離れて倒れさうになる、倒れたものもある、が鴨居の方は、外づれさうには見えないのです。『大丈夫だ。大丈夫だ。』

と私はまた云ひ續けました。膝の上の子に、默つて向うを向いてゐます。豪灣の客は、菩薩の前へ坐つたまゝ、その光る眼をぢつと外を向けてゐます。中學生の方は、兩手を疊の上に突いて首だけ上げて、亀の子のやうな恰好をしながら外を見てゐます。ふだんから地震ぎらいな男は、逃げ出さうとして立ちはしたが、足がちやうどに踏めないので、部屋の一部分をあちこちと動きまはつてゐるだけです。

やうやう搖れが小さくなつたので、この間に階下へ下りようと梯子段の上まで來て見ると、そこはかなりこはれてゐました。上下動で突き上らげられた時、梯子段は立つてしまひ、立つ時に、上の廊下のところを突き破つたと見えます。

下りようとして躊躇してゐる私は、階下の方から小學生の女の子の急に泣き出した泣き聲を聞きました。見おろすと、その方は梯子段の下へ來、二階を見上げて泣き出したのでした。後

で聞くと、その子は母親と一しよに今まで茶の間で、怖さをこらへてゐたのが、二階へあがつて私たちの樣子を見ようと思つてそこまで來て、梯子段のこはれたのを見るとこらへてゐたこはさが急に悲しみになつて泣き出したのだと分りました。

階下は、模はみんな外づれて倒れてゐました。棚のものは落ちてころがりまはつてゐました。母親は青い顏をしてその中に立つてゐました。

『よく逃げ出さなかつた』

と私がいひますと、

『私たちばかり逃たつて爲方がありませんもの、それよりこの子がかわいさうでしたこゝほがつてまごまごするので、茶餘臺の下へ入れてやつたのですが、入ひつてゐられなくて、這ひ出しはひだしするんです。それを見てゐる方がつらかつた位です。』

『搖る迄しが來る。出よう。』

私たちはみんな門の狹い通りへ出ました。

出て見ると通りはその邊の人で一ぱいになつてゐました。みんな怖しさに眼が据はつて、そして跳先の人か大分ゐました。

『もう大丈夫だらう。』

と私たちは家へ入りました。

その時私は初めて男に氣が附いて、

『家へ行つて見るといい。』

と注意しますと、

『さうでした、さうしませう。』

と男は急いで歸つて行きました。

その時は私は、もう此れだけのことだらうと思ひました。小さな地震はまだ引つきりなしに來るが、あんな大きなのが來た後だ、もう大きなのはあるまいと思つたからでした。そして今少ししたら外づれた模を立てようなどと思つてゐました。

門の通りで、

『火事が、火事だ。』

と人のいふのを聞いたのは、それから間もない時でした。

私は二階へ上つて見ました。東南の方、神田か麴町かと思はれる方角の空には、低い雲が一面に懸つてゐました。

『雲のやうだ。』と私は思ひました。煙にしてはいかにも大きいからです。

それは煙でした。その煙は、南の空から東の空へ懸けて、即ち東京全體の空の方へ擴がりました。そして夕方からは、廣く黄いろく、灰色だつたのが、一色の眞つ赤な色と變つて來ました。

この雲は、一日から三日まで、少しも散らずにゐたのです。

そして二日の夕方からは、餘震の不安も火事の心配も、紛れてしまふやうな、憤りを持ち出しました。

大人から子供まで、何くも男性といふ男性は、みんな自警團へ集まて行きました。

東京としての災害、被害者のこと、それらは筆紙には盡せ

美術院の會場で

山本鼎

帝都は美術セーションのはじまりで、九月一日は院展二科展の招待日でした。別に普段と變らぬ上天氣で殘暑なほきびしく、僕は白麻の背廣を着ていゝ氣もちで上野へ出かけました。美術院の會場で平福百穗君に會ひ、ちよつと話をして別れたとたん、あの大地震でした。五號館は硝子天井ですからすさまじい響をたてゝ、今にもみ碎かれさうでした。繪は外れてぼんぼん床に飛び落ち、石膏像が倒れて壞れました。僕は二度目の大ゆれに思はず走つて裏口から博物館前の廣場へ出ましたが、其時空はもうほこりで黄色くなつて居ました。そして鼻や眼が痛くなる程細かい塵が飛んで來ました。博物館の屋根を見ると瓦が皆落ちて土煙がたつて居て、多くの人がそちらへ駈けてゆくのでした。『これはひどい、きつと火事がはじまるぞ』と思つて居る間もなく山下の方でジャン〳〵〳〵といふ半鐘をうちはじめました。其時既に七ヶ所から火事がはじまつて居たのです。長田秀雄君夫妻と出會つて、つれ立つて西鄕さんの銅像のある見晴し臺へゆき四方を眺めましたが、廬烟に覆はれ遠くは見えませんでした。半分になつた十二階は火を吹いて居ました。山を目がけて來る人は刻々に加はり、見る間に公園入口の廣場は人と荷物で混雜しはじめ、ゆりかへしの來る度に叫び揚げて動搖するのです。池の端へ來て見ると對岸に盛んな火の手があがつて居る。今しも大學病院がやげて居るのでした。電車はむろん止つちまい、市街自動車だけが利くのでしたが來るのも來るのも人を一つぱいつめて駈けぬけてしまふので、僕は歩く事にきめ、服と帽子をかうもり傘に結びつけてそれをかつぎ、どんどん大森へ急ぎました。其時分には、もうすべての人は家を空けて電車路へ避難し、氣の早い連中は焚出しをやつて居ました。今川橋の處へ來ると左手が火で五六丁の幅に火焰が渦を巻いて居ました。水の手は何處にも揚らず、電車路へ荷を運びだして人々はぼんやり火事場を眺めて居るやうでした。丸の内へ出ると日々新聞社の裏が火でした。銀座へ來ると、時事新報のむかふが燒けて居ました。新橋まで殆どつぶれ家といふものを見かけなかつたが、芝へはひると夥しいつぶれ家でした。往來へのめつたのやぴしやんこにつぶれたのや、一堆の掃き溜のやうにこなごなになつた家だのが斷續して居ました。增上寺前の松林はもう避難民で一つぱいで、僕の關係して居る會社の人達も皆其處に避難して居ました。東海道から池上街道へ出て大森の家へ着いた時は、すつかり日が暮れ眞つ赤な東京の空が家根や地面に反射して薄氣味の惡い葡萄色の闇をつくつて居ました。家の人々は塀の外へ疊を敷いて其處にかたまつて居ました。

教會から中野へ

寺内萬治郎

こんな話がございます。

妻に死に分れた父親が、可愛い幼兒を他手に渡して、遠い國へ出かせぎに行きました。吾兒の上を思ふて、安からぬ數年をすごして歸つて來ました。早速駒を踊らせながら、吾兒をあづけてある家に行つて見ました。可愛い吾兒は、見違へる程大きくなつて居ました。しかし、悲しい事ではありませんか、勞苦のために變りはてた、父親の姿を見て、なき出さんばかりにして、逃げようとするのです。父親は、むりやりにだきかゝへ、わたしはお前のお父さんだ、わしはお前のお父さんだ、と云つて、可愛さとなさけなさに、だいてだいて、だきしめて、おそろしや、可愛さあまつて、とでも云ふのでせう、たうとう、可愛い吾兒の呼吸の根をとめてしまつたと云ふ事です。

みなさん、こんどの地震は、中々ひどうございましたネ。それに、あんな大きな火事が起りまして、私は生れて初めてです了旋地震の起りました時、私は、本郷湯島六丁目の教會に居りました。地震と同時に身をかゞめまして、私はお祈りいたしました。

『天のお父さま。私はあなたの子供です。おれがひです、どうか、この東京の何百萬と數へられる人々が、あなたのおつしやる、私はお前のお父さんだよ、お前はわたしの愛兒だよ、との、あなたのみこゝろが、胸から胸に通じまする樣に』と。

地震はやみました。私は會堂を出ました。崩れ落ちた帝都の四方八方から、火の手があがりました。私は市外中野の家に居る妻子が心配でした。又數時間後のこの街々の有樣が心配でした。私は電車の動かない混亂の街中を、云ひ樣のない心みいだいて、歸りました。妻子は無事でした。妻は地震の間吾兒二人を兩腕にかゝへて、くづれるばかりの家の中で、お祈りをして居つたさうです。

この大災害より五六年前、私が美術學校を出まして間もなくすでに歡樂の毒氣に迫ひたてられ、こゝ中野に落ちのびたのが仕合せにも、此度數萬の同胞を呑みつくした火炎に面接する事なくしてすみました。垣根にまつわるお隣の朝顔。朝毎に小さくはなりますが、夏さながらの美しい花が、今もつて見られますのは、何といふ幸福な事でせう。

いゝ仕事をせなければ、ほんとにすまない氣がします。

行衛不明のペン

水谷まさる

その日、わたしは二階の書齋で、ある原稿を書いてゐた。すると、ふいに異樣な音がして、烈しく二階が震動しはじめたので、わたしはペンを持つたまゝ、書齋のなかを見まはした。その時、わたしの頭に浮んだ考は、今考へるとすこぶる愚なものであつた。

『なぜ自分の家ばかりが、こんなに搖るんだらう？』

といふのがそれである。ふいの震動のために、頭のなかが、妙に混亂したのかも知れない。

だが、『地震だ！大變な地震だ！』と氣づいたのは、それから長いことではなかつた。だつて、唐紙はつれるし、壁の隅がこはれて、壁土は落ちるし、がたんと大きな音を立てゝ本立が倒れて、あたりいちめんに本が飛び出すといふ騷ぎだつたから。

やけたおた人形（蕗谷虹兒畫）

わたしはほとんど夢中で立ちあがつた。けれど、よろ〳〵してたちやんとは歩かれない。今にも家が倒れて、潰されるのではないかと思つた。外へ逃げやうにも、たつてい階下へ降りて行けさうにもない。逃げても、逃げずにここにゐても、死ぬ時は

死ぬ、助かる時には助かるといふ氣があつたので、唐紙のはづれた戸棚から、蒲團を一枚ひき出して、頭からかぶつた。

だが、階下にゐる母と弟のことが氣になつた。なぜといふはつきりした理由なしに、早く二人が逃げなければ、二人の生命が危いやうな氣がしてならないので、わたしは階段のところまで行つて、

『外へ逃げなさい。』と、大聲で繰り返し叫んだ。でも、返事は聞えなかつた。たぶん外へ逃げたのだらうと思つて安心した。

おそろしい氣持だつた。今にも家が潰れて、なにかが落ちて來るんだらうと、心がまへをしてゐた。けれど、云はば猫に追ひつめられた鼠のやうな、あきらめも一方にはあつた。

地震がやんだ。わたしはさつそく階下へ降りた。母と弟は箪笥のかげに、くつつき合つてゐた。

『外へ逃げなさいと、幾度も云つたけど、聞えなかつたんですか？』と訊いたら、

『まあちやんまあちやんと、こつちでもさん〳〵呼んだよ。』と云はれた。さう云はれてなるほどと思つた。たしかにわたしは夢中だつたのだ。同時に、二階のもの音も烈しかつたのだ。

でも、三人が無事だつたのは、ほんとに深い喜びであつた。血を分け、血につながるものだけが、かういふ場合に感じる喜びを感じた。それからの搖り返しには、三人とも庭に出てゐたから、最初の時よりずつと不安がすくなかつた。

わたしの家では、ハンだけが行衛不明だつた。蒲團をひき出す時にどうかしてしまつたものらしかつた。

『助けてくれー』

齋藤佐次郎

あの恐ろしい大地震が襲つて來た時私は博文館印刷所にゐました。何か少し搖れたやうな氣がしましたが、地震には極めて呑氣なので『おや、地震かな』位に思つて一寸立上つて部屋の中を見廻しました。すると、忽ちに天地が覆るやうなあの大地震になつてしまつたのです。

『これやアいかん。』と駈出さうとしましたが、私のゐたところは二階なので長い梯子段を下りなければ外へ出られないのです。ふと、見るともなく窓の外を見ると、あの宏壯な印刷所の煉瓦建が、ガラ〳〵！、砂煙を擧げて倒れてゐるではありませんか。

『これはいよ〳〵いけない。仕方がない。こゝで運を天に任せる。』さう私は決心してしまひました。

搖ること、搖ること、家は今にも潰れるかと思はれる程です。やがて何百坪とある最近出來たばかりの鐵筋コンクリート建の工場が、メチヤ〳〵に倒れてしまつたのです。砂煙を擧げてゐた煉瓦建の方も、ガラガラと一と搖れ毎に音響を立てゝ崩れて行つて、もう家根までも潰れてしまひました。倒れた鐵筋コンクリート建の下から、

『助けてくれ……』と叫んでゐる聲が聞えました。

地震嫌ひな私

本居長世

平常から極度に地震のきらひな私、どんな小さな地震でも一番先に飛び出す私、地震と云ふ字は勿論のこと似た字を見ても似た發音を聞いてもゾッとして身體中栗立つ私、地震がある度友達が直ぐ何より先に私のことを考へると云はれて居る私、その私の今回の驚き加減は大抵御想像が出來ませう。實はあの日の朝仕事も大體形付いたので二三日好きな箱根へでも行つて精養して來やうと仕度したのですが、何だか氣が進まなくなつたのでぐつ〳〵して居るとあの驚きです。丁度友達に手紙を書いて居た私はあの振動に先立つコーッと云ふ地鳴りに早それと豫感したのか、側にゐた貴美子と宣文（長男）とを兩わきに抱へて大地のゆるぎ出した時にはもう庭の眞ん中に飛び出して居ました。自分ながらこの早わざには感服しました。

あの地鳴と家屋のこはれる音と全市民の叫びごゑ。何と云ふ恐ろしい響でしたらう。二人の小供をかゝへて大地にしやがんで危く身體の中心を取つてゐた私は、やがて目の前の地面にひびが入り段々目を開いて來たのでもう生きた空はありませんでした。二人の小供を力のあらん限り抱きしめながら破滅、最後、と云ふ言葉がふと頭にひらめいた時、貴はもうポーッとして何も考へられなくなりました。其時貴美子はふと思ひ出した樣に姉さんは大丈夫かしらと申します。なるほど姉のみどりは始業式の爲學校へ行つたきりまだ歸つて來なかつたのでした。多分歸りの電車の中だらう。それなら大丈夫だらうと申しても貴美子は大變だ〳〵とまだゆりやまぬ大地の上をよろめきながら門のかたへ出て行きます。それを追つて私共も門を出ると不動樣の燈籠はもう一本も殘らず倒れて居ります。振動が止み二十分たつても三十分たつても姉は歸りません。貴美子は早や狂氣の樣に泣きさけんで私一人であるいて青山へ姉さんをさがしに行くのだと强情を張ります。其中に東京市内の空には黑煙がそこ〳〵に立上り、まさしく火事だなと思ふ瞬間に、グドーンと云ふ大爆聲、目近の森影からまた黑煙が立上ります。誰いふとなく目黑火藥庫が爆發したと騷ぎはいよ〳〵ひどくなつて來ました。一時間すぎ二時間すぎてもみどりは歸りません。貴美子は姉ちやん〳〵とあてもなくそこらを泣きながら驅け廻ります。姉を思ふ貴美子の眞情には私も泣かされました。三時を過ぎてからそれでも惡なくみどりは車で送られて歸つて來ました。ああ姉さんが、とそれを見た時の貴美子の喜び、あゝ貴美ちやんと事から飛び下りた姉の顏、二人抱きついて涙ぐんだ其瞬間私は自分の子供の斯うした美しい姿を見たのはこれが始めてでした。ふだんは可成り仲のよくない姉妹、事々に喧嘩をする姉妹、それは私が常々から自分が教育方針を誤つて居るからかなどと心を痛めて居たのでしたが、一朝事あれば矢張り姉妹は姉妹、斯うなろのだなと心から安心した事でした。

ドンキホーテ繪物語

水島爾保布

九

ちやうどその時ドン・キホーテの家には友達の坊さんと村の床屋の親方が訪れて來てゐました。

ドン・キホーテはその二人に、十人の巨人を對手に大格闘の眞最中、ロシナンテが躓いて倒れたので思はぬ不覺を取つたなどと、大そう口惜しさうに話しました。

人々は程のよい受言葉であしらひ、あしらひ、やゝともすれば壁に向つて突喚でもしさうなドン・キホーテをやゝとそゝ寢床へ擔ぎ込みました。そしてその間に姪と婆やとは、坊さんと床屋の親方とに相談して、主人の病氣の原因である武者修行の本を悉く焼き捨て了ひました。

十

それから三日ばかりしてやつと床を放れたドン・キホーテは、早速好きな讀書に取りかゝらうとして、初めて大事の書物が一冊殘らず消えて失くなつた事を發見しました。姪と婆やとは前もつて坊さんに教へられてゐた通り、『魔法使ひが眞黒な雲に乘つて來て、書物をあらひざらひ浚つて行つて了ひました』と、話しました。

『なに魔法使ひと申すか。さてはフレストン奴が某の武勇を妬んでかゝる卑怯な振舞ひを致したに相違ない。』と、ドン・キホーテは天の一方を睨んでさういひました。

併し書物を無くした位ゐではドン・キホーテの武者修行熱は少しもさめやうともしませんでした。少しもさめないどころか今度は近所の小百姓でサンチョ・パンザと云ふ正直者と近い中にどこかの島を占領してそこの王樣にしてやるといふ約束でもつて主從の誓ひを取り交し、旅費や着替へのシヤツなど迄用意して、或晩こつそりと家を脱け出しました。ドン・キホーテは例の甲冑に身を固め痩せ馬のロシナンテに跨り、家來のサン・チョパンザは大きな胴亂と革德利とを肩にかけ、驢馬のダップルといふのに乘つてその後につゞきました。

十一

やゝ暫く行きますと、突然ドン・キホーテはぴたりと馬を止めました。

『あれ見よサンチョ、遙かの行方に巨人の一群、某の路を遮らうと致して居る。いでや門出の血祭に打ち平げてくれよう。』

『どこで御座います。どこに巨人の一群が現はれたので御座います。』と、サンチョパンザはキョロキョロ眼で探しました。

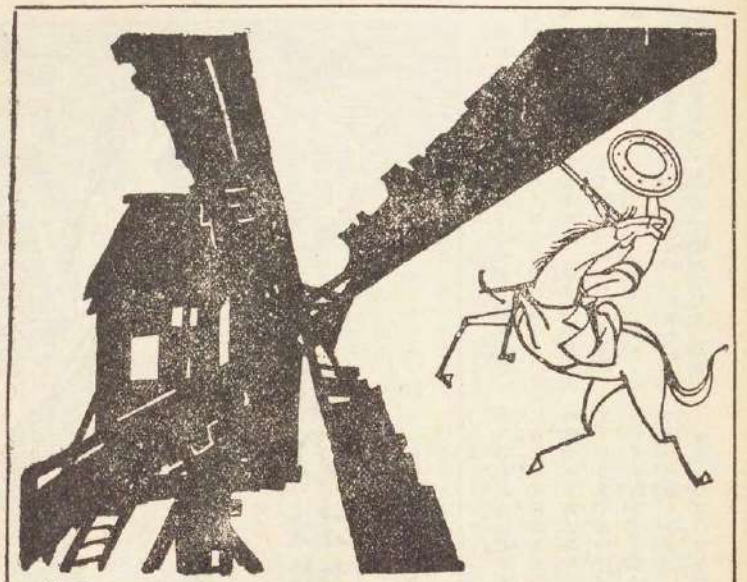
『彼處を見い。空飛ぶ雲をも捉へるばかり長い腕を打振つてゐるではないか。』

『殿様、あれは粉碎小屋の風車で御座います。』と、サンチョ・パンザは笑ひました。

『其方は正しく魔法によつて眼をくらまされたものと見える。某程の武士が何で妖怪と風車とを見間違へやう。』と、云ひ捨てゝ家來の止めるのも聞かず槍を掻ひ込んで一散に走つて行きました。

と、巨人の一群は一ときに長い腕をぐるぐる振り廻し初めました。

『ものものしや妖怪ども、ラ・マンチャの勇士ドン・キホーテ見參。』と、叫喚りながら勢鋭く突きかけました。



十二

ドン・キホーテが巨人と見て取つたのは、實はサンチョ・パンザのいつた通り、粉碎白に仕掛けた風車でありました。ドン・キホーテはの風車の翼を目がけて槍を突きかけたのでありました。ちやうどその時、風車は非力の勢ひで廻つてゐる最中だつたのでドン・キホーテは馬諸共宙に釣られて、あなやといふ間もなく、遙の向ふに眞逆様に拋り出されて了ひました。サンチョ・パンザこの有様に仰天して、驢馬に鞭打ちながら馳せつけ大地にへたばりついてゐるドン・キホーテを助け起しました。

『殿様、もし殿様、御怪我は御座いませんか。』

『いやサンチョ、大事ないぞよ。これも正しく魔法使ひのフレストンの致すところぢや。先頃は某の書物を奪り去り。今日は又巨人な風車の姿に變じて某の門出を妨げようと致した。而しサンチョよ、決して力を落すことはない。某の正義の劍はいつか必ず、彼奴の魔法を微塵に打碎くに違ひない。』といひました。

ドン・キホーテもロシナンテも幸に我怪といふ程の怪我もなく濟みましたが、大切の槍は風車との戰ひに精ひようもない迄折れひしがれて了ひました。

鐵のお城へ

三宅房子

朝になりました。明け方の光がお城に射込んだので、王子はびつくりして飛び起きました。見ると、王女がゐません。王子はあわてて皆なを起して、どうしたらいゝだらうと相談しました。

『まア御安心なさい。』とはや目がいひました。『私にはもうちやんと分つて居ますから。ここから百里先きに森があります。その森の眞中に古い樫の樹があつて、そのてつぺんに圓栗の實が一つあるのです。その圓栗が王女様です。そこまでのつぼが私の肩に乗せて連れて行つてくれゝば、私はすぐにも王女様をつれて戻つて參ります。』

さういつて、はや目とのつぼが出かけて行きましたが、のつぼの大跨では百里の道もまたゝく間に行つて來て、王子に圓栗の實を渡しました。そして、

『王子様、それを地面に投げてごらんなさい。』といひました。

いはれた通りに王子がすると、不思議にも王女がそこにひよつこり現れました。しかし、その時、もう太陽は山の上に出ましたので、部屋の扉がふいに開いて、魔法使の爺さんがダラ〳〵笑ひながら入つて來ました。爺さんは、得意そうに入つて來たのです。ところが、そこにゐないと思つた王女がゐたものですから、急に暗い顏になつて、ぶつぶつ口の中で小言をいひはじめました。と、物凄い音がして、王女の腰に卷いてゐた三本の鎖の一本が、パーンと裂けました。

魔法遣ひは王女の手をつかまへて、ぐいぐい引張つて行つてしまひました。

その日一日中、王子はお城の中を歩き廻つて、そこにあるいろ〳〵の珍しい寶物を見ました。しかし、何を見ても死んでるやうに、ぢつと動かずにゐます。ある處には、一人の王子が劍を拔かうとして刀の柄に手をかけたまゝ石になつてしまつてゐます。また或ところには、一人の騎士が逃げやうとした恰好をしたまゝ、これも同じやうに石になつてゐます。さうかと思ふと、またこつちの方には一人の下僕が牛肉を口のところへ持つて行かうとしたまゝ突立つて石になつてゐます。その外大勢の人間が、めい〳〵その時の思ひ思ひの恰好をしてゐますが、魔法遣が『今から皆な石になれ』と呼んで魔法をかけたので、そのまゝ石になつてしまつてゐるのです。

お城の中のものも、お城の外のものも、何もかもが、皆な暗い荒れ果てた姿をしてゐます。樹はありますが、葉がありません。野原もありますが、草が一本も生えてゐません。川もありますが、水が動きません。魚も住んでゐません。花も咲かなければ、鳥も歌を歌はないのです。

やがて、その日も夕方になりますと、魔法遣の爺さんがやつて來ました。そして、前の晩と同じやうに王子のゐる部屋へ來て、昨日の美しい王女を渡して行きました。

王子も三人のお伴の者も、今夜こそどんなことがあつても眠らずにゐようと用心しました。しかし、それは矢張り駄目でした。

四人とも前の晩と同じやうに、不思議な眠りにおそはれてしまひました。

明け方になつて王子が目を覺した時には、王女はもうゐませんでした。

びつくりして王子は飛び起きました。

『はや目、はや目、お起き〳〵。』と、王子は夢中で呼びました。『お前王女がどこへ行つたか分るかい。』

はや目は目をこすりながら起上りました。

『はい、わかります。こゝから二百里向ふに山があります。その山の中に岩があります。その岩の中に寶石があります。その寶石が王女様です。のつぼがそこまで連れて行つてくれゝば、すぐに行つて參ります。』

そこで、のつぼははや目を肩に乗せて駈け出して行きましたが、その速さつたらありません。本當にため息一つする間に、もう戻つて來たのです。王子がのつぼから寶石を受けとつて、それを床の上に落すと、忽ちそれが王女になつてしまひました。

そこへ魔法遣の爺さんが入つて來ました。魔法遣は口惜しがつて身體をふるはせましたすると、また物凄い音がして王女の腰を卷いてゐた二本目の鎖が、パーンと裂けました。そして、魔法遣は王女の手をひつぱつて、ぐい〳〵向ふへ連れて行つてしまひました。

その日も一日恰度前の日の通りに過ぎて行きましたが、夕方になると、魔法遣は王女をつれて出て來ました。

『今夜で約束の三日がすむのだ。今夜こそお前の方が勝つか、私が勝つか勝負だ。』

といつて、ぢつと王子の顏を穴のあく程見つめました。

その晩は、王子もお伴の者も、今夜こそはどんな事があつても眠るまいと思つて、ぢつと坐つてゐる代りに、部屋の中をあつちこつちと歩き廻りました。しかし、矢張り無駄でした。一人々々と次第に眠つてしまつて、たうとう王女は連れて行かれてしまひました。

明け方になつて先づ目を覺したのは例の通り王子でありました。見ると、いつもの通り王女がゐないので、驚いてはや目を起しました。

『起きておくれ、起きておくれ、はや目。王女がどこにゐるか見ておくれ。』

はや目は起き上ると、何にも言はずにたゞあつち、こつちと目をぴかぴかさせて見廻してゐましたが、

『王子樣、わかりましたよ。しかし、今度はすゐぶん遠いのです。こゝから三百里向ふの方に黑い海があります。その海の眞中に小さな貝があります。その貝の中に黃金の指輪が入つてゐます。その黃金の指輪が王女樣です。しかし、御心配なさいますな。私どもはこれから直ぐに行つて王女樣をつれて參ります。しかし、今日はでぶも一しよに行つてくれなければいけないのです。今日はあいつが大變な役に立つのです。』

そこで、のつぽが片方の肩にはや目を乘せもう片方の肩にでぶを乘せて、とつとと駈け出して行きました。

やがて、黑い海のところまで來ますと、はや目が貝のある場處を敎へましたが、さすがに長いのつぽの腕でも、貝が深い海の底にあるので、どうしてもそこまで屆きませんでした。

すると、デブが、

『一寸待つてくれ。俺が巧くやるから。』といひました。そして、デブはぶく〳〵とふくれ出してそこら一ぱいになつてしまふと、靜かにしやがんで口を海におつつけて、がブ〳〵水を飲みはじめました。その一口に飲む量の多いつたらありません。一分か二分もたつたかと思ふと、忽ち水量が少くなつて、のつぽの手が海の底にくつつく程になりました。

のつぽは直ぐに貝を探し出して、中の指輪を引出しました。しかし、思はぬ困難のために意外の時間がかゝつてしまひました。その上のつぽは二人を肩に乘せて走らなければならないので、いよ〳〵時間がかゝつてしまひました。そして、たうとう三人が御城に着かない內に夜が明けはなれてしまつたのです。

お城では王子が三人の歸りを今か〳〵と待つてゐました。

間もなくお日樣の光が、山の頂からつと照しました。すると、待ち疲れたやうに扉が開いて、魔法遣が入つて來ました。見ると、王子がしよんぼりたつた一人でゐるものですから、魔法遣は氣味よさそうに、

『あはは〻〻〻』と大聲で笑ひました。

しかし、この時、外の方で足音がしました。のつぽ達三人の者が歸つて來たのです。のつぽは急いで手に持つてゐた黃金の指輪を床に投げつけました。

王女がそこに現れたのを見た時、魔法遣は

どんなに口惜しがつたでせう。魔法遣は大聲を擧げて吠えるやうになりました。その聲は物凄く、お城が顫えるかと思はれました。

すると、王女の腰に卷かれた三本目の鐵の鎖が、またパーンと眞二つに裂けたかと思ふと、一羽の大きな鳥がバタ〻〻窓の外に逃げて行きました。

と、俄かに臘石のやうな王女の顏がパラ色に變つて來ました。そして、今までは啞のやうに默つてゐたのが、蘇生つたやうに口をきゝ出して、王子にお禮をいひました。

しかし、黑い鳥がゐなくなつて生返つたのは王女ばかりではありませんでした。石になつてゐた人達はみんなまたもとの人間に返りました。馬は厩の中でヒーンと嘶きました。花は花園の中で咲きはじめますし、鳥は空中を飛び廻りました。魚は水の中でとびはねました。全く何も彼もが生き返つたのです。みんな嬉しさうに見えました。

そこで王子は急いで支度をして、王女と三人のお伴の者達と一しよに、お父樣のお城を指して出發いたしました。

年とつた王樣は、もう二度と王子が生きて返つて來ることがないと諦めてゐたのに、歸つて來たのですから嬉さの餘りお泣きになりました。そして、出來るだけ早く王女と結婚の式を擧げてくれと仰ぜました。

王子と王女の結婚の式には鐵のお城で魔法にかつてゐた人達も、呼ばれて來ました。しかし、式が濟むと、のつぽとはや目とデブの三人は、また他所へ仕事をみつけに行かなればならないといつて、新夫婦にお別れを告げました。

しかし、王子は三人を引止めて、是非自分達と一しよにゐてくれ、その代り何でも望み通りにしてやるからといひましたが、三人の者は『私達は怠けてゐることは大嫌ひです。私達は忙しく暮してゐなければ氣持が惡いのです。』と答へて、そのまゝ又新しい仕事を探しに出かけて行つて了ひました。（をはり）

影踏み

（影踏み遊技童謡）

野口雨情

お出し　お月さん
影法師　お出し
出そか　影法師
踏まそか　とんと
うつれ　影法師

影法師　うつれ
出たか　影法師
踏んだか　とんと
お出し　お月さん
影法師　お出し
うつれ　影法師
踏め踏め　とんと

編輯室より

通信

▽この度の大震災に際し、皆様御無事でございましたか。東京は實に悲慘な有様でございます。地方においての方も新聞紙などで御存知のことゝ思ひますが、こんなことがあちうとは想像もつかない程ひどい有様です。

▽何にいたせ、未曾有の大地震の後、で三日三晩の間、あの廣い東京市が火の海となつて燒けてゐたのですから、全くお話の外です。怨ちにしてあの立派な建物の並んでゐた銀座通りも、活動寫眞や芝居の一ぱい並んでゐた淺草公園も夢のやうに燒けたしまつたのです。

▽今東京の町を歩いて見ますと、どこまで行つても燒野原で、その中を政府の二働車が市民の食べるお米を積んだり、お味噌を積んだり、或は兵隊さんを乘せたりして走つてゐます。また中には、運送馬車が盛ごしらへの乘合馬車になつて、品川と上野の間をゴトンゴトンとのんきさうに行くのも見えますが、これが帝都のたゞ一つの最初の交通機關だと思ふと涙が出ます。

▽さて、今度の震災で本社出版部は上野公園前にありました爲めに不幸全燒してしまひました。しかし、幸に金の星社の方だけは震災を免れて、社員一同も無事でありましたことは、何よりも有難いことであります。何にいたせ、社のある處は市外田端といつても市とごく接近してなりまして、殆ど市と同様のところですが、火事が上野公園と不忍の池の處でくひとめることが出來ましたので、幸に助つたのです。もし、そこで消し止めることが出來なかつたら、到底助る見込みはなかつたのでした。

▽でも隨分大騒ぎをいたしました。三日目の晩になると、風下になつたので、火の子がどん〳〵落ちて來るといふ有様でしたから、荷物を運び出す仕度をしたり、それよりも先づどつちの方面へ逃げて行つたら命が助かるだらうと思つて高臺に上つて、遠くの方を見乍ら考へてをつたのでした。

▽しかし、何にしても仕合せでした。社も無事であつたばかりでなく、雜誌もすぐと引續いて發行出來る準備になつたのですから。本誌の印刷所である博文館印刷所は、齋藤主幹の話にもあつた通り最も大きな建物二棟までめちや〳〵に破壞してしまひましたので、折角の苦心になつた『アラビヤン・ナイト號』も發行が出來ないかと思つてをりましたが、幸にして本誌の製版が半分餘助りましたので、ともかくも『第一アラビヤン・ナイト號』として出すことが出來ました。引續いて後の部分も『第二アラビヤン・ナイト號』として發行いたします。

▽尙、前述の通りの次第で本社出版部は全燒いたしましたので、この際出版部を本社と合併いたし、今後一層努力いたす覺悟でございますから、宜敷お願ひいたします。從來發行の書籍の中で不足の分は直ちに印刷に着手いたしましたから、品切れの分も全部揃ふ筈でございます。

▽幸にして、今度の『金の星』の企によつて、日本の面白い傳說が皆さんに知つていたゞくことが出來ましたら、これ程うれしい事はありません。フランスにはフランスのよい傳說があつて、世界に誇つてゐるやうに、またドイツもイギリスも同じやうによい傳說で自分の國を自慢してゐるやうに、私どもゝ日本の美しい傳說を世界に知らせたいと思ひます。日本の傳說は決してフランスやドイツやイギリスに劣るものでない事を信じます。日本獨特の面白いものであること、知らせなければなりません。

▽童話のおぢさんとして有名なドイツのグリム兄弟は、ドイツ人族の本當の歷史を知りたいと思つて民間に傳へられてゐる童話や傳說を研究いたしましたが、『金の星』で募集した今度の傳說童話を全部集めたら、自ら日本民族の研究になる譯です。やがて、よい機會にこれを一冊にまとめて出版したいとも考へてをります。『尙、十一月號とすべき豫定の『傳說童話號』は震災につき印刷所の都合により、繰延して新年增大號として發行することゝなりました。』

傳說童話號に就て

▽愛讀者の方々から各地の面白い傳說を募集しましたところ、皆さんが非常に面白い試みだとお感じになつたと見えて、記者迷もびつくりする程澤山に投稿が集りました。その數は實に多數で、總計八百七十六篇ありました。

▽只今選者の諸先生が熱心に讀んでゐて下さいますから、近い內に一等二等三等の當選作が明らかになりますが、今のところ諸先生にお話を伺つて見ますと、なか〳〵よい作があるさうで、先生方も非常に意氣込んでおいでになります。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集致します。誌友にはいろ〳〵特典がございますから、本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速お送り致します。なりません。(記者)

新らしく出た本

◆**青い空**(本居長世先生作曲、野口雨情先生作詞)長い間多くの人々から期待されてゐました「金の星童謠曲譜」の第三輯として現はれた曲譜集であります。野口先生の「青い空」「燕」「雨夜の傘」「でん〳〵蟲」「雀の酒盛」「呼子鳥」の六つの童謠に本居先生が曲をつけたもので、本居先生の最もお得意のものばかりです。この輯から全部伴奏がついてなります。水鳥保鋸布先生の裝幀も、頗る上品で美しくあります。この書は先きに出た「人貢船」「一ツ星さん」と共に、童謠歌曲を愛する人々の飢えを充分に滿たすことゝ思ひます(菊判一八頁。定價金八拾錢。東京市外田端三五一金の星社發行　振替東京五九五九六番)

◆**海のおかあさん**(小島政二郎先生著)毎月春陽堂から出る「新しい童話」の第十一篇であります。『ごくらくの大將「海のおかあさん」「ラクダのこぶ」「二十年後」「ふしぎなランプ」の五篇が收められてゐます。各國の有名な物語や、アラビヤン・ナイトの中から材料をとつた、何れも面白いものばかりです。(四六判一九〇頁。定價八拾五錢。日本橋區通四丁目春陽堂。振替東京一一六七番)

◆**華笛**(井上多喜三郎著)やさしい詩集であります。若き日の苦惱と、寂寞と、憂鬱が、收められた二十六篇の詩にみなぎつてゐます(四六判六二頁。定價六拾錢。滋賀縣浦生郡日野村日野田恒三方安田新吉發行)

金の星新誌友名簿

山脇　貞子様(東京)　森内　逸夫様(北海道)
三浦　市郎様(廣島)　山下　堯様(山梨)
坂井　賀平様(靜岡)　金子多代子様(横濱)
(埼玉)谷子鶴子様(兵庫)　福原　幸吉様(東京)
岸田　成計様(奈良)　安田　敏政様(神戸)
稻葉　廣直様(茨城)　服部　元正様(名古屋)
永田　武男様(東京)　中村きみ子様(大阪)
古立　盛様(朝鮮)　津田　鶴吉様(宮崎)
加藤マサ子様(大分)　柳下友太郎様(岡山)
市川　嘉市様(佐賀)　小澤　武夫様(愛媛)
三木　好三様(東京)　石井きし子様(東京)
井上ヒサエ様(北海道)　小瀨　利一様(山形)
石塚　武司様(福井)　中戸川美代様(埼玉)
小山　清様(奈良)　小金　績様(大阪)
磯崎　翰負様(千葉)　稻垣　喜重様(高知)
杉山千代春様(長野)　鷲原　良様(山梨)
佐野チカ子様(滋賀)　石立　幸七様(栃木)
露木　信春様(三重)　矢野　敬助様(岩手)
木村サト子様(東京)　木崎　倫平様(臺灣)
渡邊　誠一様(福岡)　關　一美様(香川)
小松　辰雄様(名古屋)　尾形　修平様(富山)
山崎喜一郎様(沖縄)　桐谷　一策様(東京)
荻澤　豐三様(長野)　町田スズ子様(上海)
田中　初治様(布哇)　本間　賢作様(南洋)
田邊フミ子様(和歌山)　長谷川良一様(神戸)
加藤　正子様(熊本)　米山　要様(廣島)
本田　隆三様(横濱)　星野キクエ様(鹿兒島)
澁谷　一郎様(石川)　塙　幸子様(奉天)
近藤　勇作様(南米)

(以下次號)

讀者だより

皆様から、澤山の暑中お見舞や今回の震災につき御見舞狀を下さいましたに就て、玆に謹で深く御禮を申上げます。（此内一同）

▼暑くて皆様はさぞおこまりの事で御座いませう。僕は今年も葉山へ來て居ります。毎日海へばかりはいつてゐるので頭がよつくろになりました。前の山には蟬がミンミン啼いてをります。山へのぼると變だか何んだかわからない鳥がケキョ〳〵と啼いてゐます。山の向ふからお寺の鐘がきこえてきます。すべてのものが繪の樣です詩の樣です。（相州葉山　松井純三）

▼「金の星」八月號、それは確に新しく仕度して出ましたね。ドンキホーテが水島先生の手に一層面白く出來たのを謝します。それからこれは餘計なことかは知りませんが、一つ諸先生の素性をスツパ抜いてみます。沖野先生は和歌山縣の山奥出で芝居と木登りが御上手です二十すぎの時校長殿になられました。小島、楠山、西條、長田、宮島の諸先生は皆江戸ッ子で小島先生は慶應義塾大學の文科の先生です。野口先生は茨城縣磯原の海岸で生れただけに水泳は達者なものです。沖野先生の木登りと好一對若山先生は本名寿と申し日向の田舍生れ御酒と子供が一番すきで富士山を眺めては歌をうたつて酒を召上つていられます。ヤレ〳〵つみな事許り申しました。私は麥めしがきらひ故、宰屋へは入れないで下さい。（山口縣　白だすき二世）

▼先生今度から私もお友達に入れて下さい。やつと十六になりましたけれどももう女學校は卒業致しました。毎年休暇になりますと方方へ一人で出かけ傳說を調べて居ります。色々澤山ありますけれど文章が下手ですから一寸も書けません。只今は岐阜に參りました。又面白い傳說を聞きましたら投稿させて載きます。（神田　篠田瞳子）

▲山も野も市街も夏だ！夏だ！と叫んで居ります。諸先生方は汗にまみれて「金の星」の稿料においとしと存じます。私は人間と言ひ得る人間と成るべく懷かしい名古屋市を去つて一宮のメリヤス店の小僧に成りました。皆さまどうぞ小僧々々と云ふて可愛がつてやつて下さい。（愛知縣一宮市　森紅玉）

▼編輯部の諸先生方、御變りもありませんか、此頃の東京の暑さはほんとに厳しいことでせう。小生は毎日眞黒になつて手賀沼で水に親しんでゐます。お暇があつたら御遊びに御出下さい。（下總手賀村　染谷秋月）

▽有難うございます。そのうち暇が出來たら是非參りたく思つて居ります。（編輯部内）

▼「金の星」の諸先生　九月號の表紙を見てすつかり感心させられました。蕗谷虹兒先生の繪は全く氣品の高い童話の國にふさはしいものです。私はいま海に來て居ります。夕方になるといつも「金の星」を抱いてなつかしい慰めの世界であり影繪の國であらう所の童話の領域に彷徨ふ樂しみを持つて居ります。なつかしい影繪の國に住はれる諸先生！　御自愛下さい。（海で草之介）

▼先生のいらつしやる東京もいよいよ暑くなつて來たでせう。何のお變りもありませんか。あんなに美しい「金の星」エハガキを、お送り下さいまして、有り難うございます。お別れ」は先日、沖野先生からもお土產にいただきました。お禮申し上げます。それから「白馬」といふ童話誌を發行いたしました。社費は一月實費八錢　二錢切手四枚）皆さん、お仲間　お入り下さい。（山梨縣東山梨郡小等村　第一部五一八「白馬社」山下亮）

▼此の暑中をもめげず諸先生の御骨折になりました九月號、面白くさうして涼しく讀みました。越路の地として、野口先生の佐渡ヶ島は愉快に拜讀いたしました毎日小さな近所の小供等と樂しく唄つて居ります。私は避暑旅行なんと云ふ「時」と「金」を持合せませんのでせめて水の邊にでもと涼を納めて居ります。どうぞ皆樣御身體を御大切に「金の星」の爲に御奮勉あらん事を御願ひ致して置きます。（新潟縣下保倉村　長壁長四郎）

▼「金の星」の皆様御達者でいらつしやいますか。私は大変元気に暮してをりますの。そして昨晩本屋へまゐつて「金の星」を買つてまゐりましたの。月々の御誌の御發展ぶり本當にうれしうございますわ。ます〳〵發展して下さいませ。そして世界にならびない御本になつて下さいませれ。日本だけならもうとつくにさうでございますけれど日本だけで滿足なさつちや駄目でございますよ、よろしくて！世界一になる日の早くまゐります樣蔭ながら私御祈り致しますわ。（東京市外千駄ヶ谷すゞらん）

▼又々「金の星」エハガキをお送り下さつて有難うございます。どの繪もかはいゝ子供が活動してゐるのでうれしく思ひます。いつでも子供の樣な良い心持で暮したいと思つてゐます。「金の星」を愛讀するのも其爲です。（長野　矢下清榮）

▼いきいきした「金の星」九月號ありがたう御座いました。沖野先生のどんぐり山は諷刺たつぷりになりました先生の獨特境でありますす。牢破りは佳境に入りましたれイワンの馬鹿、ドンキホーテ、ウツツキ彌次郎の樣なのもいゝと思ひます。（山口　シロガスキ）

▲記者先生暑さにお變りありませんか。只今鼎潟に來て居ります。雞と雀の聲に眼を覺まして日暮蟬の鳴聲に田舍の夢を結びます。晝は海に泳いで眞黒になつて居ります。山に圍まれた綠の田、海と空との境界詩的とでも言ひませうか。暑中御見舞を兼ねて第一信御通知迄。（鼎潟にて　浜守一）

▼山の中の本屋の前で『金の星』を見つけては喜こんで居ります。「金の星」を愛する皆樣！　私達幼ない者が集つて作つて居る「友達」へ詩や童話を御恵み下さいませ。（長野縣麻績村　友達社）

▼八月號の「彦四郎狐」は實際おもしろかつた。作者に感謝す。（東京市外代々木　松村淑郎）

▼「青い舟」と云ふ雜誌がこんど我が校から生れました。毎月二十三日發行で、會費は一ヶ月十錢です。金の星愛讀者の皆樣どうぞ御後援下さい。（新潟縣西頸城郡青海村宇大澤　渡邊五郎一）

▼暑中御見舞申し上げます。愛讀者諸氏、お變りありませんか。「金の星」の發展を本當に心から嬉しく思ひます。創刊號からずつと、本箱にならんでゐる有樣は、隨分きれいです。（東京市外上大崎　井上正一）

▼エンゼルのやうな「金の星」！私は大好きでございます。毎月々々一ッ〳〵どれも〳〵氣に入つた詩や繪をお送り下さる先生方、私は先から（大正七年頃から）毎月讀んで居りましたが、皆樣の御仲間になつて始めて投書させていたゞきます。どうぞよろしくお願ひいたします。清い朝なむかへた時の祈り、靜かな夕べのお祈のたびに「金の星」（可愛いゝ私の大好きな名）が永久にやさしく清く可愛らしく增々盛んに神の御手にいだかれてつゞきます樣お祈りいたして居ります。……さようなら（東京にてクリーム　のバラの花子より）

▼先日は可愛らしい「金の星」エハガキをお送り下さいまして有難う御座いました。私は童話などを作ることは下手ですけれども研究する事が大好きです。野口先生の「童話十講」は私の所有の書籍中の異彩を放つて居るものです。六月でしたでせうか。先生がお出でになりまして、童話の講演をなされた時、私も御講演を拜聽に參りまして、初めて先生にお目にかゝりしました。あつ皆樣への御挨拶を忘れて居りました。誌友の皆樣。私も今度誌友となりましたからどうぞお仲間に入れて下さい。（函館　池田耕一郎）

▼記者先生――僕も是から愛讀者になりました。此の樣な面白い、優美な本があつたことをしりませんでした。が、今度友人から「金の星」を借りて讀んだ處、非常に面白いので私も愛讀することになりました。

私はこれからドシ〳〵投書させて頂きます。そして少しでも、童話や、童話を作る事が上手になつたら、どんなに學校の先生がよろこんで下さるか知れないと思ひます。（記者先生――私の投書はこれでよいでせうか。それから自由畫の紙のヨコとヨコの寸法を教へて下さい。それに誌友になるのはどうすればよいのでせう。誌上で右の二ッをお教へて下さい。（東京の郊外にて、正雄）

▽投書の形式はそれで結構です。自由畫は畫用紙八ッ切りでよいですが、表か裏へ住所と姓名を忘れずに書いてください。誌友になり度い方には「誌友規則」といふものができてゐますから、お申込み次第お送りします。（記者）

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號〆切は十月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は新年號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

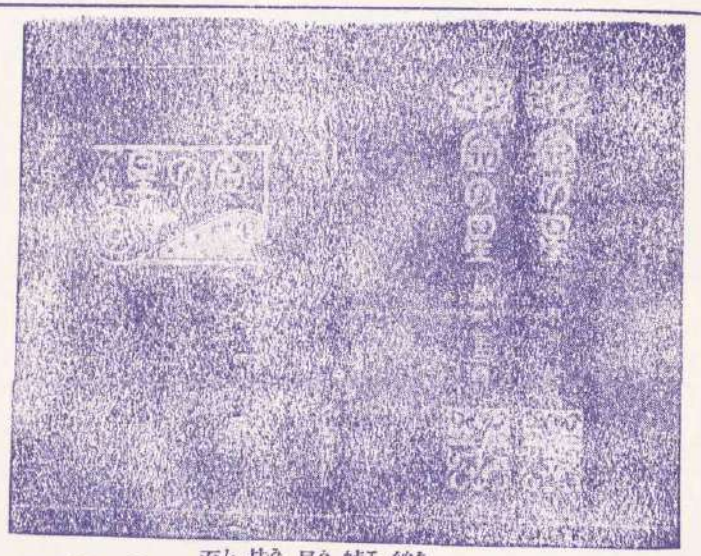
〔注意〕童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊　參拾錢　送料壹錢
三ヶ月分三冊（送料共）九拾錢
半年分六冊（送料共）壹圓八拾錢
一ヶ年分十二冊（送料共）參圓六十錢
但し四月號九月號新年號は特別號で四十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五九五九六番

〔送金〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
〔注意〕▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名はハッキリ書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十二年十月三日印刷納本（毎月一回）
大正十二年十月五日發行（一日發行）
東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人　齋藤佐次郎
東京市小石川久堅町百八番地
印刷人　大橋光吉
東京市小石川久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所
東京市外田端三百五十一番地
發行所　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番



美しい「金の星」の合本
第二輯が出來ました!!

▽水島爾保布先生裝幀△

總クロースへ麗しい金箔を置いたそれはく美しい裝幀ですから皆樣の書棚にお飾りになつたら、どんなに見事でせう。そしてこれが幾冊にもなつたら、一段と皆樣のお書齋を美しくする事でせう。賣切れません内至急に御申込み下さい。

第一輯（再版中）　定價金一圓八十錢　送料十四錢
第二輯（第五卷一號より同六號マデ）　定價金一圓八十錢　送料十四錢

東京市外田端三百五十一番地　金の星社　振替口座東京五九五九六番　電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

ライオン歯磨

朝ばかりでなく
夜、おやすみに
なる前にも、
きつと、きつと
ライオン歯磨を
お使ひなさい。
三度のお食事で汚れた歯
を、そのままにして置き
ますと、ねてゐる間にむ
しばが出來るからです。

——むしばは夜、出來る——

会 26 寄